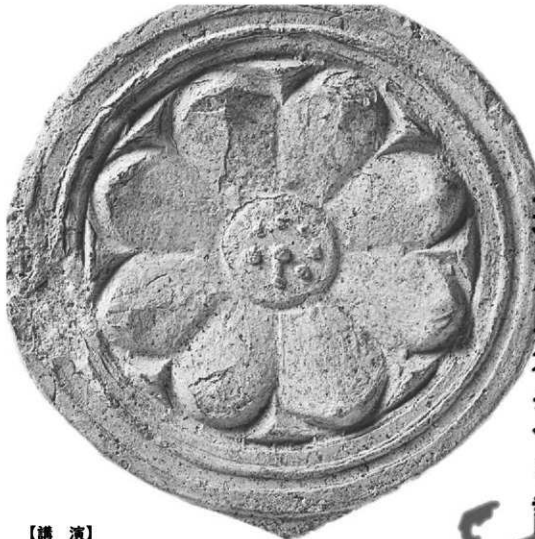


史跡 寺町廃寺跡

(推定三谷寺)を語る



【講演】

講演1:「寺町廃寺跡の発掘調査成果」
藤川 翔 (三次市教育委員会主任主事)

講演2:「周辺遺跡からみた寺町廃寺創建の歴史的背景」
加藤 光臣 (三次市文化財保護委員会委員長)

講演3:「備中栢寺廃寺と備後寺町廃寺の素弁八葉蓮華文軒丸瓦」
鬼田 修一 (岡山理科大学特任教授)

講演4:「出雲国西部で出土した寺町廃寺跡同范・同紋瓦をめぐる
-飛鳥時代の同范瓦と僧侶の活動」
花谷 浩 (出雲弥生の森博物館館長)

講演5:「備後国『三谿寺』(≒寺町廃寺跡)の歴史的位置」
西別府 元日 (広島大学名誉教授)

講演6:「寺町廃寺の建築学的考察」
藤田 盟児 (奈良女子大学教授)

講演7:「備後・安芸の白鳳期寺院と寺町廃寺」
松下 正司 (比治山大学名誉教授)

【パネルディスカッション】

「史跡寺町廃寺跡(推定三谷寺)を語る」



目 次

【午前の部（講演）】

講演 1：「寺町廃寺跡の発掘調査成果」・・・・・・・・・・・・・(1)

三次市教育委員会主任主事 藤川 翔

講演 2：「周辺遺跡からみた寺町廃寺創建の歴史的背景」・・・・・・・・・・・・・(7)

三次市文化財保護委員会委員長 加藤光臣さん

講演 3：「備中栢寺廃寺と備後寺町廃寺の素弁八葉蓮華文軒丸瓦」・・・・・・・・(13)

岡山理科大学特任教授 亀田修一さん

講演 4：「出雲国西部で出土した寺町廃寺跡同範・同紋瓦をめぐって
・飛鳥時代の同範瓦と僧侶の活動」・・・・・・・・・・・・・(19)

出雲弥生の森博物館館長 花谷 浩さん

講演 5：「備後国「三谿寺」(寺町廃寺跡)の歴史的的位置」・・・・・・・・・・・・・(25)

広島大学名誉教授 西別府元日さん

【午後の部（講演）】

講演 6：「寺町廃寺の建築学的考察」・・・・・・・・・・・・・(29)

奈良女子大学教授 藤田盟児さん

講演 7：「備後・安芸の白鳳期寺院と寺町廃寺」・・・・・・・・・・・・・(34)

比治山大学名誉教授 松下正司さん

【パネルディスカッション】 「史跡寺町廃寺跡（推定三谷寺）を語る」

コーディネーター 松下正司さん

パネラー 亀田修一さん、花谷 浩さん、加藤光臣さん

西別府元日さん、藤田盟児さん

<参考資料>・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(40)

寺町廃寺跡の発掘調査成果

三次市教育委員会
主任主事 藤川 翔

1 はじめに

寺町廃寺跡（てらまちはいじ）は、中国地方を代表する古代の地方寺院跡として、昭和59（1984）年に国史跡に指定された三次市を代表する遺跡のひとつである。日本最古の仏教説話集、『日本霊異記』所載の「三谷寺」に比定されることでよく知られ、三次市教育委員会では8次にわたって発掘調査を実施してきた。今回はその成果をご紹介します。

2 三次市（みよし）の文化財と寺町廃寺跡

(1) 三次市の文化財

指定文化財 … 242 件（内訳：国12件、県61件、市169件）[R4.6時点]

史跡：浄楽寺七ツ塚古墳群、花園遺跡、矢谷古墳、陣山墳墓群、**寺町廃寺跡**

※ **国史跡**：候補となる埋蔵文化財（遺跡）：約46万件のうち、その数は0.4%。



地理的特徴＝中国地方の中央部に位置。古くから交通・交易の要衝地として発展

(2) 寺町廃寺跡の位置と環境

ア 所在地：広島県三次市向江田町2666 他

イ 周辺の環境：三次盆地の東側、馬洗川と国兼川に挟まれた丘陵地の中央に位置。

⇒ **寺町廃寺跡の周囲は古墳群が多く、三次地域でも特異。創建の背景との関係。**

(3) 遺跡の概要と関連遺跡

【遺跡の概要】 … 飛鳥～平安時代まで存続したとされる古代の地方寺院跡

→『芸藩通志』巻113・114には、その存在が記載。

江戸時代後期から、寺院跡の存在が認識されてきたとわかる。

【関連遺跡】 … 寺町廃寺跡の他にも、関係する古代の遺跡が立地。

① **大当瓦窯跡**（だいとうがやう）

三次市和知町大字大鳴に所在。寺町廃寺跡に瓦を供給した窯跡【付足指定】

② **上山手廃寺跡**（かみやまてはいじ）

三次市向江田町上山手に所在。奈良時代前期の寺院跡

3 『日本霊異記』と寺町廃寺跡

- 最古の仏教説話集『日本霊異記』(にほんりょういき)とは？

(正式名)：『日本国現報善惡靈異記』(にほんこくげんぼうぜんあくりょういき)

(編纂者)：葉師寺(奈良県)僧、景戒(けいかい)

『日本霊異記』上巻7縁 - 備後国三谷郡の寺院、「三谷寺」-

亀の命を贖ひ生を放ちて現報を得亀に助けらる縁 第七

禪師弘濟は、百済国の人なり。百済の亂の時に當りて、備後国三谷郡の大領の先祖、百済を救はむが為に軍旅に遺さるる時に、誓願を發して言さく「もし平に還來らば、諸の神祇の為に伽藍を造立て多諸の寺を起らむ」とまうす。

遂に災難を免れ、すなはち禪師を請へて相共に還來り三谷寺を造る。其の禪師の伽藍と諸の寺とを造立てたる所以なり。通俗觀て、共に為に歎敬ふ。禪師尊き像を造らむが為に、京に上り財を売る。既に金と丹との等き物を買得て、難破の津に還到る。時に海の辺の人々大なる亀四口を売る。禪師人に勤へて買ひて放たしむ。すなはち人の舟を借り、童子二人を奪て共に乘りて海を渡る。日曉れ夜深けて舟人欲を起し、備前の骨嶋の辺に行到りて、童子等を取りて海の中に擲入る。然うして後に禪師に告げて云はく「速に海に入るべし」といふ。師教化ふといへども賊なほ許さず。茲に願を發して海の中に入る。水腰に及ぶ時に石を以て脚に當つ。其の曉に見れば、龜負へり。其の懐中の浦にして、海の辺に其の龜、三箇て去る。是れ放てる龜の恩を報ゆるかと疑ふ。

時に賊等六人、其の寺に金と丹とを売る。檀越まづ量るに筒を過ゆ。禪師後に出て見れば、賊等忙然しくして退還を知らず。禪師驚感ひて刑罰を加へず。仏を造り塔を嚴り、供養しりぬ。後に海の辺に住みて往き來る人を化ふ。春秋八十有余のとしに卒ぬ。畜生すらなほ恩を忘れず、返りて恩を報ゆ。何にはむや、人にして恩を忘れむや。

(出雲路修 1996『日本霊異記』新日本古典文学大系 30 岩波書店 を一部改変して引用)

- ① 備後国三谷郡(現在の三次市南部)の郡司大領の先祖が白村江の戦いに参戦
- ② 終戦後、百済(くだら)僧 弘濟(ぐさい)を連れて帰還し「三谷寺」建立
- ③ 仏像の材料を買った帰り道、弘濟が海辺で助けた亀の報恩で難を逃れた話



百済僧 弘濟が建立した「三谷寺」 = 寺町廃寺跡 ではないか

4 寺町廃寺跡における発掘調査の歩み

- 第1～4次発掘調査

… 昭和 54～57 (1979～1982) 年：遺跡の内容確認を目的とした緊急調査を実施。

昭和 59 年 (1984) 5 月 25 日：国史跡に指定

- 第5～8次発掘調査

… 平成 30～令和 2 (2018～2020) 年：史跡整備に伴う内容確認調査を実施

4 寺町廃寺跡における発掘調査の成果

(1) 遺 構 [第1図]

● **金堂跡** (こんどう) = 仏像が安置される重要な建物跡。

【基壇】(きだん)

規模：東西15.74m×南北13.40m、現存高0.6～0.8m(推定高1.8m)

外装：基壇周囲の下部に、1段の埴(せん)を立て並べる。

⇒ 寺町廃寺跡で確認された基壇外装は、現状では日本唯一の発見例。

【階段】…基壇の南北に階段跡を発見。

南階段：東西幅2.59m、奥行(現存)0.7m、現存高0.6m

北階段：東西幅2.62m、奥行2.0m、現存高0.5m(推定高1.62m)

【燈籠】(とうろう)…東西中軸線上、基壇南縁から約5.1mの場所で確認。

規模：据付掘方 東西1.05m×南北0.89m、柱径0.49m、深さ0.6m

材質：周囲で石材は確認できず。木製の可能性(上原2020)。

⇒ 仮にも木製の燈籠遺構であれば、全国4例目で日本最古級。

● **塔跡** (とう) = 寺院のシンボル。經典や仏舎利を奉納。

【基壇】(きだん)

規模：東西11.14m×南北11.14m、現存高0.6～0.8m(推定高1.35m)

外装：基壇周囲の下部に、1段の埴(せん)を立て並べる。(金堂と同じ状況)

【階段】…南階段は削平。北階段を確認。

北階段：東西幅2.3m、奥行1.95m、現存高0.6m(推定高1.05m)

● **講堂跡** (こうどう) = 僧侶が勉強する建物。

【基壇】(きだん)

規模：東西25.10m×南北14.70m、現存高0.6m(推定高0.6m)

外装：基壇周囲の下部に、1段の埴(せん)を立て並べる。(金堂・塔と同じ状況)

【階段】…基壇南面の3箇所で南階段を確認

中央階段：東西幅3.8m、奥行0.9m、現存高0.45m(推定高0.45m)

東階段：東西幅2.0m、奥行0.9m、現存高0.35m(推定高0.45m)

西階段：東西幅2.0m、奥行0.9m、現存高0.30m(推定高0.45m)

● **回廊跡** (かいろう)

東面・西面・北面を確認。南面は削平。東西幅4.2～4.4mの単廊。

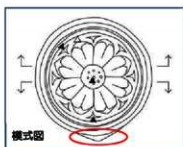
構造：外側に「犬走り」、内側に「雨落ち溝」が廻る。

⇒ 北(南)面西回廊の東西長 > 北(南)面東回廊の東西長(約1間：2.3m分長い)

寺町廃寺跡の加藍配置 = 法起寺式加藍配置

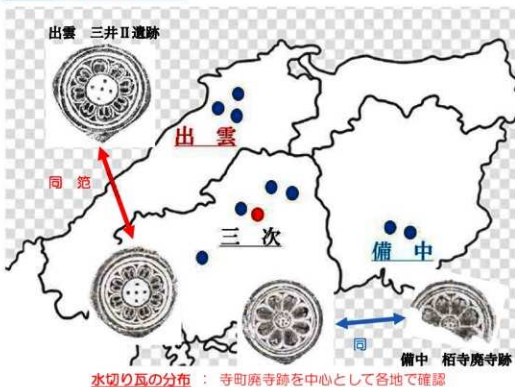
(2) 遺物

- **軒丸瓦** … 瓦当部下端が三角形に尖る「水切り瓦」(松下 1969・1993)(妹尾 1991)



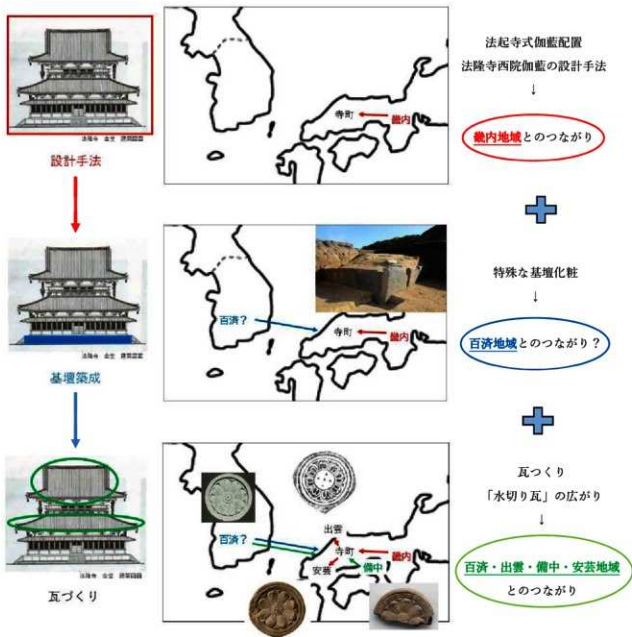
赤丸の部分 : 三角形に尖っている。[第2図]

↓
頂点で水が切れる = 「^{みずき}^がわら」
水切り瓦



- **丸瓦** … 99%以上が行基丸瓦。全長 38cm, 厚さ 3 cm, 凸面格子叩き目が主体。
- **平瓦** … 95%が粘土板桶巻作り。粘土紐桶巻作り・一枚作りが 5%。
- **埴** … 基壇外装の埴も含めて総計 250 点以上。全国有数の出土量を誇る。
- **須恵器・土師器** … 8～9 世紀代の出土量が多い。7 世紀後半のものもある。
- **唐三彩** … 器種は長頸壺。表面の釉薬にまともり、盛唐期と判断。
→ 長頸壺の出土は、日本国内では福岡県沖ノ島遺跡でしか確認例がない。
唐自体であまり生産されず、地方寺院跡での出土例は極めて特殊。

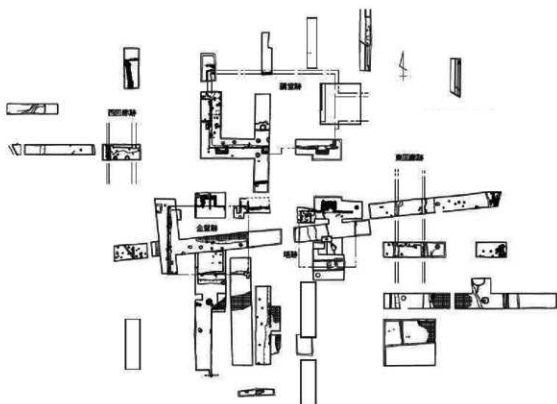
5 おわりに ～「お寺づくり」からみた、寺町廃寺跡の特徴～



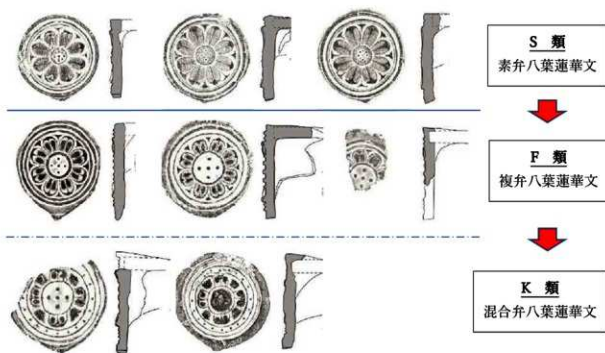
寺町廃寺跡の造営時と造営後には、「地域間のつながり」が捉えられる

<参考・引用文献>

- 出雲路修 校注 1996 『日本書異記』新日本古典文学大系 30, 岩波書店
 上原眞人 2020 『寺院財庫の考古学』『季刊考古学』第 152 号, 雄山閣
 妹尾眞三 1991 『安芸・備後の古瓦(その1) - 兼有から復元へ - (造寺活動と寺町廃寺式瓦の探明)』『古文化談叢』第 26 集, 三次市教育委員会編 2022 『史跡寺町廃寺跡-推定三谷寺跡第1～8次発掘調査総括報告書-』, 三次市教育委員会
 松下正司 1969 『備後北部の古瓦-いわゆる「水切り瓦」の種相-』『考古学雑誌』55・1, 日本考古学会
 松下正司 1993 『水切り瓦再考』『考古学論集-潮見浩先生退官記念論集-』, 潮見浩先生退官記念事業会
 三舟隆之 2016 『第2章 『日本書異記』地域関係説話形成の背景-備後国を中心として-』『日本書異記』説話の地域史的研究, 法藏館
 毛利光俊彦 2002 『M 埴・土管ほか』『山田寺発掘調査報告-本文編-』創立 50 周年記念奈良文化財研究所第 63 冊



第1図 寺町廃寺跡 遺構検出図【※スケールは任意】



第2図 軒丸瓦各型式の瓦当拓本と瓦当文様模式図【S=1/6】

周辺遺跡からみた寺町廃寺創建の歴史的背景

三次市文化財保護委員会

委員長 加藤 光臣

1 はじめに

律令国家形成期ともいえる7世紀後半代に、当時の三谷郡三谷郷の領域に白鳳期の寺町廃寺が創建された。寺町廃寺跡は、平安時代初期（9世紀前葉頃）編纂の『日本霊異記』（最古の仏教説話集）記載の三谷郡「三谷寺」に比定する研究がすでに明治時代の段階でみられ、以来古代の文献に登場する寺院として様々な研究・議論が行われて全国的にも著名となっている。また、1974年以後の発掘調査によって「法起寺式」の整然たる伽藍配置が確認されるとともに、当時の政治の中心地である畿内地方の寺院跡と比べても遜色のない内容を示すことが明らかとなった。

では、このような際立つ特色を窺わせる壮麗な寺院が、一体なぜ中国山間地の三次盆地に創建されたのか。その謎に迫るために、寺町廃寺出現前の歴史的背景を周辺遺跡の特色から考えてみた。

2 古墳時代の社会と寺町廃寺創建の歴史的背景

寺町廃寺跡が備後北部地域最古の寺院として創建された背景には、寺町廃寺出現以前の三次盆地の歴史的特質が深く関係していたと考えられる。

三次盆地の考古学的調査・研究によってこれまでに明らかにされた遺跡の特色を概観するならば、特に古代の飛鳥・白鳳期（7世紀代）の前時代である古墳時代（4～6世紀代中心）の三次盆地は、とりわけ強い地域的独自性を発揮し続けた地域として注目される。

三次盆地は、広島県内の古墳数（約12,000基）の三分の一に相当する4,000基近い古墳が集中的に存在する地域として有名であり、これまで広く研究者たちからも注目されてきた。では、中国山地中央部のそれほど広くもない山間盆地で、しかも河川が集合するがゆえに低平地の多くは氾濫原で水害に遭うことも多く、田畑の生産力も決して豊かとはいえない地域に、なぜこれほど多くの古墳が築かれたのか？……これまで様々な考え方が提示されてきたものの、いまだ納得できる明確な解答が得られていない大きな謎なのである。

今回この古墳時代の謎が、備後北部地域最古の秀麗な寺院として三次盆地に寺町廃寺が出現した背景に大きな要因として脈絡・連動しているのではないかと考えてみた。

三次盆地の古墳時代の社会の謎を解く主なキーワードとして、①畿内地方の「倭（ヤマト）王権」との関係性、②朝鮮半島からの「渡来系要素」との関係性、③経済的要素としての「鉄器及び鉄」の生産の3点を掲げることができるのではない

か。そして、この三大要素が複雑に絡み合って三次盆地の古墳時代の歴史的特質が醸成されたものとする。以下、この三要素の内容や相互の関係性について記す。

倭王権は日本列島全域への政治的影響力の拡大のため、沿岸部のみならず山間地域の交通・流通網の掌握に努めることとなる。このような状況下で、山陽・山陰の多方向へ繋がる中国山間地の交通の要衝地である三次盆地は、すでに古墳時代前期の4世紀代には倭王権の影響力拡大の戦略上の適地に位置づけられた可能性が高い。それゆえに、古墳時代を通じて倭王権による三次盆地への断続的な政治的介入があったものと想定される。

たとえば倭王権との強い関係性が、5世紀前葉頃の三次盆地最大規模の県史跡糸井大塚古墳（糸井町：墳長65mの帆立貝形古墳、径110mを越える幅20mの周堤帯で囲む）を出現させるとともに、規制と政治的役割の下で5世紀代を通じて「帆立貝形」古墳が際立って多い地域性を生じさせることとなったのであろう。

また、5世紀後葉の県史跡酒屋高塚古墳（西酒屋町：推定墳長46mの帆立貝形古墳）から出土した画文帯獣帯鏡は、全国で出土した26面の同型鏡の1枚であり、倭王権直属の武官的な地方首長層へ配布されたとも考えられている。まさに当時の三次盆地と倭王権との直接的関係を物語るものであろう。このような密接な倭王権との関係が、国史跡淨楽寺・七ツ塚古墳群（高杉町：総計176基）に代表されるように、5世紀後葉以降に異常な数の古墳を生じさせた一要因（倭王権の兵站地的役割を担ったか？）とも考えられる。一方、酒屋高塚古墳出土の円筒埴輪には備中地方独特の製作技法が見出され、当時の備中地方との深い繋がりも明示する。後の寺町廃寺創建時の関係性の前提的背景ともいえよう。

ところで、5世紀代の古墳には当時の朝鮮半島からの渡来人との関係を示唆する渡来系要素もしばしば見出される。たとえば、武具の鉄製短甲（よろい）を出土した5世紀後半の県史跡三玉大塚古墳（吉舎町：墳長41mの帆立貝形古墳）では、豊富な副葬品とともに鉄製の鏝（カスガイ）や朝鮮半島南部製ともされる筒形銅器（槍・矛・杖等の柄の下端に取付けた筒状青銅器）も出土している。また、酒屋高塚古墳では釘が出土している。しかも、竪穴式石室は渡来系の特色を示すとも指摘されている。5世紀代の埋葬棺への鏝や釘は全国的にも少なく、渡来人との強い関連を示す遺物である。そのほか、半島製と考えられる初期須恵器を出土した古墳も散見される。古墳以外では、三重遺跡（四拾貫町）の5世紀後葉の竪穴住居跡で朝鮮半島源流のオンドル遺構ともよばれるL字状カマドが検出されている。三次盆地では唯一例であるが、渡来人によって造られた可能性が極めて高いといえよう。

倭王権は、河川による氾濫原の制御は難しいゆえに田畑の生産力に乏しい三次盆地の開発を強力にバックアップしたのではないか。そのために、大陸の最新技術を担った渡来系の人々を三次盆地へ送り込んだ可能性が高い。彼らの主導で井堰・築堤による河川・池等の治水・水利や水田・畑地開発のための土木技術や冶金など

鉄器生産の新技术を導入して盆地内の開発が進められたと推測される。

平安中期の『倭名類聚抄』では、三谷郡は「三谷・松部（私部=きさいべの誤記とされる）・江田・額田（ぬかた）・刑部（おさかべ）」の5郷が記され、名代部（大王家=皇族が所有する部民）に由来する郷名が3郷も集中しており、三谷郡と倭王権の深い関係性を明示している。一方、三次郡は「上次（かみすき）・幡次（はたすき）・下次（しもすき）・布努（ふぬ）」の4郷とされるが、三次は本来「みすき」と称され古代朝鮮語の「スキ=村」を表したとも考えられている。三次盆地と渡来系の人々との深い関わりを伝えている可能性が高く、古墳時代の遺構・遺物の渡来系要素も、当時の同様な社会状況を物語るものではなかろうか。また、寺町廃寺の創建時には渡来系の流れを汲む人々による全面的支援があった可能性も高かろう。

なお、備後北部では、すでに5世紀中葉～後半頃には鍛冶工房を伴う集落跡（庄原市大成遺跡）が出現し、6世紀代には進んだ鍛冶技術（スサ入り粘土による地上式鍛冶炉など）も普及する。しかも、7世紀前後頃には白ヶ迫製鉄遺跡（三良坂町）の発見で鉄そのものの生産活動も明らかとなった。6世紀後半以降には大半の集落遺跡で鍛冶炉や鉄滓が検出され、鉄器製造の普遍化が窺える。さらに7世紀以降には道ヶ曾根遺跡・野竹遺跡（三良坂町灰塚）のように、鍛冶生産を専門的に行い円面硯（スズリ）や墨書土器も伴うことから公的役割を担ったと想定できる大規模な集落跡が成立するなど、飛躍的に鉄及び鉄器の生産力を高めることとなる（表）。

朝鮮半島からの鉄素材の輸入に依存していた倭王権は、早い時期から中国山地での鉄確保を模索した可能性が高く、そのためにも新たな冶金の知識や技術をもつ渡来系の人々の三次盆地への移入や積極的な支援を行ったのではなかろうか。

現状では、岡山県の備中で6世紀中葉～後半頃の日本列島内最古の製鉄炉（総社市千引カナクロ谷遺跡）が確認されているが、白ヶ迫遺跡の発見はさほどの遅れなく三次盆地でも鉄生産が開始されたことを明示している。これまでの倭王権並びに備中地方や渡来系の人々との強い関係性を背景に、備中の製鉄技術が備後北部へも早い段階で導入された可能性も推測され、今後の更なる検討が必要であろう。

ところで、鍛冶生産が伸張していく6世紀には、三次盆地で新たな前方後円墳が出現する。5世紀代とは異なり、墳長30m未満で15～20m前後にすぎない小規模な小型前方後円墳が異常に多く造られる。他の地域ではすでに前方後円墳の減少化もしくは築造停止の動向を示す中で、全く真逆の特異な現象を生じるのである。

現在確認できている三次盆地の前方後円墳（帆立貝形古墳含む）80基のうち約58基（72.5%）が後期に属すると推測される。とりわけ、寺町廃跡周辺の向江田町～和知町地区の丘陵地は、円墳の横穴式石室墳と共に小型前方後円墳が最も集中する地域であり（図）、古墳築造の新たな墓域が形成されたかの感も強い。小型前方後円墳の爆発的ともいえる築造と前方後円墳の墳形への固執は、当時の大きな政治変動や鉄器生産を背景とした中小の新興豪族層の成長を示唆するとともに、

表 備後北部地域の製鉄及び鍛冶関連遺跡一覧

遺跡名	所在地	時期	特色内容	備考
白ヶ直製鉄遺跡	三次市三良坂町	6世紀末～7世紀前半	円筒形製鉄炉2	原料砂鉄
小和田遺跡	庄原市新庄町	7世紀後半～8世紀	製鉄炉4(円筒形・方形)+集落跡・鉄滓	原料砂鉄石
常定家双鉄遺跡	庄原市口和町	6世紀末～7世紀前半	円筒形製鉄炉2	
戸の丸山製鉄遺跡	庄原市湯川町	7世紀代?	長方形箱形製鉄炉1	原料砂鉄
楯松遺跡伊雲跡	三次市三良坂町	7世紀中葉～後半	横口付炭窯1	
南山遺跡伊雲跡	三次市有原町	7世紀後半～8世紀代	横口付炭窯2	
弘法山伊雲跡	三次市甲奴町	?	横口付炭窯1	
常定家双炭窯跡	庄原市口和町	6世紀後半代?	横口付炭窯1	
龜龜遺跡伊雲跡	庄原市水越町	6世紀末～7世紀前半	横口付炭窯2	
野田大岡山炭窯跡	庄原市東城町	?	横口付炭窯1	
善正平2号遺跡	三次市甲奴町	7世紀前半～後半	集落跡・鍛冶炉、鉄滓(精錬滓、鍛錬滓)、輪郭口、製鉄炉壁片、製塩土器	原料砂鉄石
蓮ヶ池遺跡	三次市三良坂町	7世紀後半～8世紀前半	集落跡・鍛冶炉、鉄滓(製錬滓)、鉄塊産遺物	原料砂鉄
見尾東遺跡	三次市三良坂町	6世紀末～7世紀前半	集落跡・鍛冶炉、(砂鉄精錬滓・鍛錬滓、鉄鉱石製錬滓)	原料砂鉄・鉄鉱石
見尾西遺跡	三次市三良坂町	6世紀末～7世紀前半	集落跡・鍛冶炉、鉄滓(砂鉄製錬滓・精錬滓・鍛錬滓)、鍛造割片、輪郭口	原料砂鉄
杉谷B-C地点遺跡	三次市三良坂町	6世紀後葉～7世紀前半	集落跡・鉄滓(砂鉄精錬滓、鉄鉱石製錬滓・鍛錬滓)	原料砂鉄・鉄鉱石
野竹遺跡	三次市三良坂町	8世紀中葉～9世紀前半	集落跡・鉄滓(製錬滓、鍛錬滓)、輪郭口	原料砂鉄
重岡山遺跡	三次市大田幸町	6世紀末～7世紀前半	集落跡・鉄滓	
宮の本遺跡	三次市向江田町	7世紀前半	集落跡・鍛冶炉、鉄滓	
三重ノ島遺跡	三次市四拾貫町	6世紀中葉・7世紀前半	集落跡・製塩土器、鍛冶炉、鉄滓(砂鉄製錬滓・精錬滓、鉄鉱石鍛錬滓)	原料砂鉄・鉄鉱石
和知白鳥遺跡	三次市四拾貫町	6世紀前半～6世紀中葉	集落跡・鉄滓、製塩土器	
松ヶ直A地点遺跡	三次市東酒屋町	6世紀後葉	集落跡・鍛冶炉・鉄鉱石・鉄滓	
松ヶ直B地点遺跡	三次市東酒屋町	6世紀後葉～7世紀中葉	集落跡・鍛冶炉・鉄鉱石・輪郭口、鉄滓	原料砂鉄
松ヶ直F地点遺跡	三次市東酒屋町	6世紀中葉・7世紀代全般	集落跡・鍛冶炉・鉄鉱石、鉄滓、製塩土器(6世紀中葉)	
松ヶ直神田遺跡	三次市東酒屋町	7世紀前半	集落跡・鉄滓	松ヶ直G地点遺跡
緑岩遺跡	三次市東酒屋町	6世紀後葉	集落跡・鍛冶炉、鉄滓	
下本谷遺跡	三次市西酒屋町	7～8世紀	都御所・集落跡・鉄滓、鍛造割片・輪郭口	三次都御所
大蔵遺跡	三次市下志和地町	7世紀前半	集落跡・鉄滓(製錬滓)	原料砂鉄
向泉川2号遺跡	庄原市口和町	7世紀前半	集落跡・製塩土器	
馬ヶ段遺跡	庄原市水越町	6世紀末～7世紀前半	集落跡・鉄滓(鍛錬滓)、製塩土器	
西山遺跡	庄原市新庄町	6世紀末～7世紀初頭	集落跡・鉄滓	
小和田遺跡	庄原市新庄町	7世紀前半	集落跡・鍛冶炉、鉄滓	
浅谷山東B地点遺跡	庄原市上原町	7世紀前半	集落跡・鍛冶関係鉄滓(精錬滓)、炉壁片	原料砂鉄石
清水3号遺跡	庄原市上原町	7世紀前半	集落跡・鍛冶関係鉄滓(砂鉄精錬滓・鉄鉱石製錬滓)、炉壁片	原料砂鉄・鉄鉱石
岡山A地点遺跡	庄原市上原町	7世紀前半～後半	集落跡・鍛冶関係鉄滓(砂鉄精錬滓・精錬滓、鉄鉱石精錬滓)、製鉄炉壁	原料砂鉄・鉄鉱石
大成遺跡	庄原市三日市町	5世紀中葉～6世紀初頭	集落跡・鍛冶関係鉄滓(精錬滓)、輪郭口、製塩土器	原料砂鉄石
原清1号遺跡	庄原市三和町	6世紀後半～7世紀初頭	集落跡・鍛冶炉、鉄滓(精錬滓・鍛錬滓)、鉄鉱石、鍛造割片	原料砂鉄石
境ヶ谷遺跡	庄原市川高町	6世紀初頭～中葉	集落跡・屋外鍛冶炉2、鉄滓、輪郭口、約300gの砂鉄、製塩土器	炉・砂鉄の時期?
糸巻遺跡	庄原市川西町	5-6世紀代	集落跡・鉄滓、輪郭口、製塩土器	
宮脇遺跡	庄原市高町	7世紀後半	集落跡・鍛冶炉、鉄滓(精錬滓)、鍛造割片、鉄鉱石、輪郭口	原料砂鉄
常納原遺跡	庄原市西城町	6世紀末～7世紀初頭	集落跡・鍛冶関係鉄滓(鍛錬鍛冶滓)、7.5kgの鉄鉱石、鍛冶炉壁片	
牛乗遺跡	庄原市本村町	6世紀末～8世紀	集落跡・鉄滓、輪郭口	岡岡出土

倭王権がこのような新興豪族層を直接的に掌握するために伝統的な格式をもつ墳形とされた前方後円墳の築造を認める方法をとった結果なのであろうか。それゆえに、「ドンダリの背比べ」的な小規模な墳形に強く規制されたのかもしれない。

向江田・和田地区での小型前方後円墳や横穴式石室墳の集中的築造は、この地域が主要な墓域(墓地区域)として当時の集団によって意図的に設定されていたのではないかと推測される。ではなぜ当地が選ばれたのであろうか。実は寺町地区の小盆地は当時陸路交通の要地でもあった背景を要因とした可能性が高いのである。

小型前方後円墳や横穴式石室墳の多くは寺町地区の小盆地を囲む丘陵上に築造

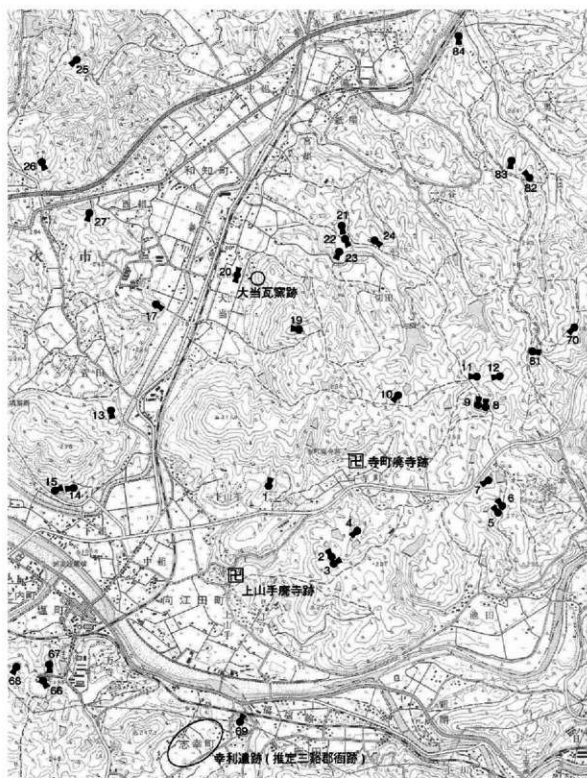


図 寺町廃寺跡周辺の前方後円墳位置図

されているのであるが、この丘陵地には古くから山尾根道や連結する谷道が繰り返し造られており、起伏の少ない山丘上の山道は庄原市の木戸・山内・七塚町及び

一木町（律令期の惠蘇郡や三上郡の領域）や三良坂の田利・仁賀・灰塚（三谷郡）方面へ通じる最短距離道ともなっているのである。しかも周辺域の丘陵地帯での鉄生産や鉄や鉄製品等の物資の運搬を考えると、三谷郡域内では地理的に上下川や馬洗川の渡河も最少で済むメリットも高いのである。おそらく、寺町地区は当時東西南北方向への山尾根道が集合する交通の枢要地に相当する場所であったのではないか。視界がほとんど開けない環境にある山中の山道沿いに古墳が並び点在するあり方は、まさに古墳が道標の意味をもっていたことを物語るのであろう。

したがって、寺町地区は交通路の要地であるがゆえに、6世紀代に墓域とされるとともに後には三谷郡三谷郷の中心的領域ともされたのではなかろうか。さらには以上のような背景が、狭隘な小盆地である当地へ寺町廃寺を創建する一要因にもなったと思われるのである。つまり、寺町廃寺創建に際して、山丘に囲まれた狭隘な小盆地とはいえ交通路の要地であり、かつ寺院建立者を守護してくれる祖先一古墳群—を祀り供養する場所として意図的に選定されたのではなかろうか。

3 おわりに

以上、三次盆地に寺町廃寺が創建された歴史的背景を探るため、その前提的条件ともなった古墳時代の遺跡・遺物等の特色に窺える三次盆地と倭王権との関係性や渡来系要素の影響が色濃く窺える意味等について考えてみた。

おそらく倭王権や渡来系の人々の主導のもと、当時の先進技術によって盆地内の土地開発も大きく進展したものと思われ、池堤を築き谷奥までも開発・水田化された盆地内の原初的景観はすでに6世紀後半代には生み出されたと推測される。また、このような社会状況を背景に7世紀前後頃には鉄生産も行われており、その開始はさらに溯る可能性が高い。古墳時代のこのような社会背景や経済的要素が、寺町廃寺を三次盆地に成立させる要因へ連動したものと思われる。したがって、寺町廃寺跡の発掘調査によって明らかとなった際立つ希有な先進的要素は、すでに前時代までに培われた多様な社会関係を背景として生じた現象であったと思われる。

なお、『日本霊異記』によると「三谷寺」は「三谷郡の大領（最上位の郡司）の先祖」の祈願による建立とされる。しかし、周辺域の小型前方後円墳や横穴式石室墳のあり方からみると、単に大領の一郡司による氏寺ではなく、在地の複数の中小豪族層たちの力も結集した共立体制によって創建された可能性が高いと考える。

最近の調査では、寺町地区を西側へ抜けた下山手の丘陵斜面で7世紀前後頃の横穴式石室墳である箱山1号墳（円墳）から金銅装の「圭頭大刀」が出土している。また、菅田の谷に面した丘陵上の向江田中山遺跡では、7世紀前半～中葉頃の豪族居館、もしくは公的な役割をもつとも想定される整然とした柱並びの建物も発見された。周辺域での当時の官人的立場の人物の存在を示すものであり、今後の調査・研究の進展で寺町廃寺を支えた人々の姿がより明らかになると期待されよう。

備中栢寺廃寺と備後寺町廃寺の素弁八葉蓮華文軒丸瓦

岡山理科大学 亀田 修一

『空寂寺町遺跡・備中三谷遺跡1-8
次期調査委託発注執行書』(中)刊載シテ
バシウム

『空寂寺町遺跡・備中三谷寺(本館)
令和元年11月19日(土)10時~15時
みよしまちづくりセンター』

備中栢寺廃寺と備後寺町廃寺の 素弁八葉蓮華文軒丸瓦

岡山理科大学
亀田修一

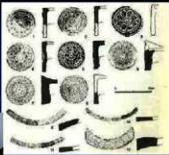
1. はじめに

- 備中栢寺廃寺の素弁八葉蓮華文軒丸瓦
- 備中栢寺廃寺と備後寺町廃寺の素弁八葉蓮華文軒丸瓦の比較
- 備中栢寺廃寺と備後寺町廃寺の素弁八葉蓮華文軒丸瓦の同范関係が語るもの
- おわりに

2. 備中栢寺廃寺の素弁八葉蓮華文軒丸瓦

[備中栢寺(かやでら)
廃寺]

- 岡山県総社市
- 備中国賀夜郡服部郷
- 7世紀中頃~8世紀



栢寺遺跡(常より)

湯野夫・亀田修一2000『吉備の古代
寺院』吉備人出版 (3)は寺町遺寺

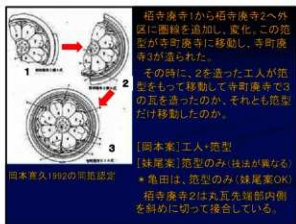








〔寺町庚寺創建瓦〕栴寺庚寺1類りと同范で、范キズが大きくなっている。つまり、寺町庚寺創建瓦は栴寺庚寺瓦より新しい。ただ、寺町庚寺創建瓦は、瓦当表面上部に丸瓦をそのまま接合しており、製作技法は異なる。そして、瓦当下部に小さな突起(水切り部)が作られている。



岡本寛久1992の同范認定

栴寺庚寺1から栴寺庚寺2へ外側に圏線を追加し、変化。この范型が寺町庚寺に移動し、寺町庚寺3が造られた。

その時に、2を造った工人が范型をもって移動して寺町庚寺で3の瓦を造ったのか、それとも范型だけ移動したのか。

〔岡本案〕工人+范型

〔妹尾案〕范型のみ(技法が異なる)

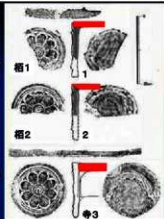
・亀田は、范型のみ(妹尾案OK)

栴寺庚寺2は丸瓦先端部内側を斜めに切って接合している。



栴寺庚寺1は瓦当面の上部に無加工の丸瓦をかぶせているが、栴寺庚寺2は丸瓦先端部内側を斜めに切り接合。そして寺町庚寺3は瓦当裏面上部に無加工の丸瓦をそのまま貼り付けている。つまり、栴寺庚寺2と寺町庚寺3は製作技法が異なる。

備後寺町庚寺の創建瓦は、備中栴寺庚寺から范型をもって(または、借りて)きて、別の工人たちがこの三次の地で生産した。この工人はどこの人？





栢寺廃寺(1, 2)と寺町廃寺(3)の瓦の製作技法比較
 このように1, 2と3の丸瓦接合技法は異なり、寺町廃寺の創建瓦は、栢寺廃寺から買ってきた(または、焼けて、ついでに、焼いた)もので、別の瓦工たちが別の場所で作成した。

4. 備中栢寺廃寺と備後寺町廃寺の素弁八葉蓮華文軒丸瓦の同范関係が語るもの
 (1)寺町廃寺創建瓦はだれが造った？

- ・備後では、寺町廃寺に築家に先行する瓦の詳細は不明。素弁まで広げると、三原市毘沙門山下遺跡出土軒丸瓦が7世紀前半まで遡り、周辺で最も古い。しかし、畿内系の約橋廃寺式で、文様は異なり、丸瓦接合技法も無加工の丸瓦を瓦当上部に被せるもので寺町廃寺創建瓦とは異なる。つまり、備後や安芸には寺町廃寺創建時の瓦造りに指導者として関与した人物はいないようである。
- ・備中では、美原廃寺と末ノ奥家跡群の瓦が7世紀前半まで遡る。ただ、美原瓦は丸瓦先端部に推合用の細いキズをつけており、寺町廃寺創建瓦とは異なる。末ノ奥瓦は丸瓦先端部内面を斜めに1回ケズリ、栢寺1類bと類似するが、寺町廃寺創建瓦とは異なる。

・備後・安芸・備中は、寺町廃寺創建瓦との関係は不明。そこで

- 百濟の神師弘濟(？)自らが多少瓦造りの知識があり、范型は備中栢寺廃寺から借りてきたが、美原の瓦造りは自らが周辺の人々を指導しながら製作した可能性
- 弘濟とともに渡って来た百濟の人々の中に多少瓦造りの知識を持つ人物がいて、范型は栢寺から借りたが、彼らが造った。→百濟では寺町廃寺創建瓦と同様の技法の瓦は、(文様は異なるが)扶余王宮近くの旧街里寺跡で見られる。
- 畿内から寺造り、瓦造りなどの工人を呼んでくる。「金丹など」購入に都に行ったときに依頼？、(栢寺寺跡) 范型は畿内系であり、少なくとも畿内の技術や情報は入っている。



扶余旧街里寺跡軒丸瓦 (百濟末ノ奥7世紀初)

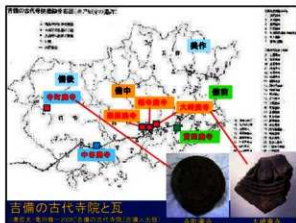


(2)なぜ、新羅系の築壇は備中・樺寺庚寺からなのか

＊伽藍配置・基壇造り・瓦造りは、百濟や畿内からの工人の関与が考えられるのに、なぜ、築壇は備中・樺寺庚寺から？

a. 備中と備後で古くからの関係があった？。これも含めて樺寺庚寺造営者も白村江の戦いに参戦し、三谷寺造営者とともに戦い、樺寺庚寺造営者が先に帰国し、寺院造営を始め、一つのお堂などができた段階に、あとから戻ってきた三谷寺造営者に築壇瓦葺などの援助を行った可能性

b. 樺寺庚寺造営者が「賀茂郡」の有力者であったことは間違いなく、この周辺で5世紀代以降の朝鮮半島系考古資料が多く確認されていることから、造営者が5世紀代以降の加耶系遷来人の子孫、またはそのような遷来系の人々が周辺に多くいた。三谷地域も近年の研究により、古墳時代から朝鮮半島との関わりが深いことがわかってきており、備中の豪族や遷来系の僧・人々との関わりが深かった？

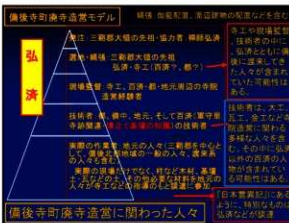


5. おわりに—寺町康寺・栢寺康寺の瓦で何を語るることができるか
* 備中貫夜郡と備後三郡の豪族たちや渡来系の人々が相互に関係?

- * 栢寺康寺の僧などと三谷寺の僧弘済が関わる?
- * 寺院造営の技術的な面で、僧・渡来系ネットワーク?
- * 仏教・寺院造営技術の伝播に中央・地方だけでなく、地方・地方もある。また、別府系類 - 日本新義の地方もいかに広がるのか、多様なルートで造営技術や造営技術などが伝播、そして備前・寺町康寺造営はこのような多様なルートに成立つ

付 栢寺康寺の瓦の断面中央部に黒い色の部分があり、約3km離れた末ノ栗家跡群で生産された可能性が明らかになった。 田中市末ノ栗家跡群の青井八重 製造番号軒丸瓦 断面の中が黒色





(おもな参考文献)

藤本晋久1997「青切り瓦」の起源と伝播の考察、近畿編制編「古墳の考古学的研究」1、近畿編制社

亀田隆一2008「百濟系古瓦の研究」(吉)弘文堂

国立社会博物館2005「百濟王美術」

国立社会博物館2007「古墳編制」認められた「古墳文化」

林葉重三1999「古瓦の古瓦」(論叢光巻)中・都築隆「考古学から見た地域文化」漢学社

奈良文化財研究所2002「阿蘇-備前遺跡」

「広島県立歴史民俗資料館」1987「ひろしまの古代寺院 寺町康寺と水切り瓦」

松下正司1999「備後北部の古瓦」『考古学雑誌』55-1

松下正司1997「水切り瓦再考」『考古学雑誌』(瀬野浩一先生追悼記念事業会)

渡部大・池田健一2005「古墳の古代寺院」古墳人出版

三宮市教育委員会2022「史跡寺町康寺跡」

町田晋博2011「古瓦類」(中国西南省地方漢学研究会)『国訳集』岡山大学 実行委員会編「中国古瓦類史の現状と課題」一古墳時代中期の古瓦一

出雲国西部で出土した寺町麿寺跡同範・同紋瓦をめぐって

—飛鳥時代同範瓦と僧侶の活動—

出雲弥生の森博物館

館長 花谷 浩

1 はじめに

旧出雲国西部に寺町麿寺跡とよく似た軒丸瓦が分布することは、ちょうど70年前の1952年に梅原末治氏が指摘し、その後、1969年の松下正司氏の総合的研究によって備後北部と出雲西部に特徴的に分布する「水切り瓦」の様相が明らかとなりました。

出雲西部での水切り瓦出土遺跡を代表するのが、出雲市神門寺境内麿寺跡（かんどじけいだいはいじあと）です。神戸川右岸の微高地に立地するこの遺跡は、40年前に範圍確認の発掘調査がおこなわれ（1982-84年）、松下氏も備後との関係を再度強調された遺跡です。

斐伊川左岸の旧神門郡の神門寺境内麿寺跡が古くから著名であったのに対して、右岸に位置する旧出雲郡での水切り瓦は近年知られるようになったものです。出雲市斐川町での出雲郡家跡探索調査では、安来市教員寺跡（きょうこうじあと）と同範の軒丸瓦とともに水切り瓦が出土しました。

これとは別に、出雲市斐川町直江南部の丘陵地帯（郡家跡関連遺跡群の東方約2km）において工業団地造成にともなう発掘調査が実施されました（1999-2003年）。この調査では、瓦窯跡1基が発見されるとともに、丸・平瓦、軒丸瓦、鴟尾などが出土しましたが、ほとんど未報告でした。その後、斐川町の出雲市への合併（2011年）のち再度造成計画が進められることとなり、埋蔵文化財調査がなされ（2012-14年）、報告書も刊行されました（2016年）。この中で未報告であった三井Ⅱ遺跡の瓦窯跡出土瓦類について報告をおこないましたが、それより先、筆者は、三井Ⅱ遺跡出土軒丸瓦と寺町麿寺跡の軒丸瓦FIBとの同範を確認し報告しました（2010年）。その後、この同範関係について、妹尾周三氏や小林新平氏、日浦裕子氏らの論考が続くこととなったのです。

本報告では、神門寺境内麿寺跡の軒瓦と遺構、寺町麿寺跡と同範の三井Ⅱ遺跡の軒丸瓦と鴟尾を取り上げます。備後と出雲という遠距離間の同範瓦の背景には、弘濟禪師の関与を想定できるのではないかと考えていますが、それを傍証するものとして、三蔵法師・玄奘（げんじょう 600・602-664）に師事した渡唐僧・道昭（どうしょう 629-700）が創建した飛鳥寺東南隅の禪院（奈良県明日香村）の同範瓦が示す道昭の事績との関連を提示したいと思います。

2 出雲における寺町麿寺跡の同紋瓦と同范瓦

古代寺院の軒先を飾る瓦を「軒丸瓦」といい、仏を象徴する蓮の花（蓮華紋）が飾られています。この蓮華紋がよく似たものを「同紋（どうもん）瓦」といいます。この紋様を作る時、主に木でできた型（瓦范 がはん）を使います。お菓子の落雁の木型と同じようなものと思ってもらえばよいでしょう。同じ瓦范で作られた瓦を「同范（どうはん）瓦」と呼びます。

(1) 神門寺境内麿寺跡（出雲市塩冶町）

浄土宗寺院の天応山神門寺の境内とその周辺が遺跡です。境内には『仮名手本忠臣蔵』で有名な塩谷判官高貞（えんやはんがんだかさだ）の墓とされる五輪塔があります。

この神門寺の庫裏の裏側（北側）には塔の心礎が残っており、周囲の調査成果によれば、基壇の一辺が11.4mの規模と推定され、三重塔が建っていたと考えられます。

神門寺境内麿寺跡からは、4種類の軒丸瓦が出土します。寺町麿寺跡のFIBにそっくり（同范ではない 同紋瓦）の1型式と、中房（蓮の花の花托）周囲に珠紋を並べる2型式。この二つは「水切り瓦」で、出土数も多い瓦（1型式が7割、2型式が2割5分）です。寺町麿寺跡と違うのは、三日月形をした無紋の軒平瓦があることです。

これら軒丸瓦の出土分布を検討すると、塔跡の西方に1型式が集中し、さらにその北方で2型式がまとまっているようです。おそらく、塔跡の西に金堂跡が、その北に講堂跡があったのでしょうか。このような伽藍（がらん）配置は、奈良県斑鳩の法起寺（ほうきじ）にちなんで「法起寺式」と呼びますが、これが寺町麿寺跡と共通します。瓦のデザインだけでなく、寺のデザインからも寺町麿寺跡との強いつながりがうかがえます。

(2) 三井Ⅱ遺跡（出雲市斐川町）

出雲平野の東南部には低い丘陵がいくつも並び、その一つを横切って古代のハイウェイ「山陰道」（道幅9m）が走っていたことが近年、確認され国史跡となりました。この古代山陰道の南の丘陵地にあるのが三井Ⅱ遺跡です。2000年にここで発掘調査がおこなわれ、古代の窯跡が見つかりました。長さ10mほどと推定され、丘陵斜面にトンネル状の穴をあけた登り窯です。窯跡の下のほうに不良品を捨てた場所（灰原）があり、大量の瓦と須恵器が出土しました。瓦には、丸瓦と平瓦のほか、軒丸瓦1種類と鴟尾（しび）と呼ばれる瓦屋根の大棟の飾りがありました。

軒丸瓦は、寺町麿寺跡のFIBと同じ瓦范から作られた同范瓦です。鴟尾は、胴部にキノコのような飾りを付けたもので、同じような鴟尾が三次市上山手麿寺跡から出土しています。

三井Ⅱ遺跡で互作りにいそしんだのは、大当瓦窯跡から互作り道具を携え、90kmもの中国山地越えをしてきた瓦工人だったと推定できます。残念ながら、ここで作られた瓦がどこの寺で使われたのかは未だわかっていません。

3 飛鳥寺東南隅の禪院とその同范瓦の分布

三井II遺跡に寺町廃寺跡F1Bの范型が持ち込まれたのは、この地に古代寺院を創建しようとした豪族が「三谷郡の大額(の)先祖」と繋がりを持っていたからでしょうか。読み方にもよりますが、「三谷寺」建立の事情を記す『日本書紀』上巻第七縁によると、百濟僧弘濟(くだらそうぐさい)は他にも多くの伽藍建設に関わったようですから、三井II遺跡での造瓦(そして造寺)も弘濟が関係したのではなからうか、と推測しています。

そう考える背景は、最初にも記した道昭の飛鳥寺東南隅の禪院と同范の瓦が示す分布状況です。禪院の軒丸瓦は、7世紀後半のものとしては変わっていて、蓮華紋を縁取る外縁がたいへん幅広になっています。当時の普通の蓮華紋だと断面が三角形になるので、とても特徴的です。

飛鳥寺は710年の平城京遷都にともない平城京左京に移転し元興寺(がんこうじ)となりましたが、禪院は本寺と離れ、右京に移転し「禪院寺」となりました。この移転先(右京四條一坊)の近くから同范瓦が見つかっています。

道昭は、禪院を建てたのち、畿内を周遊し各地で社会事業や土木事業をおこないます。大和盆地南部を東西に走る横大路の地鎮造構(橿原市)にも同范瓦が使われ、天武天皇の都づくりに深く関わった高田氏の氏寺と目される高田廃寺跡(桜井市)からも同范瓦が出土しました。

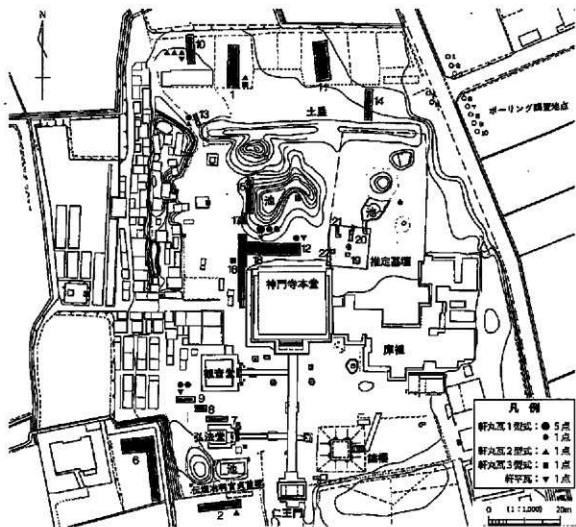
典型的なのが山崎廃寺跡(京都府大山崎町)です。民衆への仏教布教と各種社会事業、そして東大寺大仏造営に深く関わったことで有名な僧・行基(668-749)。彼は、淀川に山崎橋を架けますが、それは道昭が架橋した橋が朽ち果てていたからだ、と記録されています。行基は橋のたもとに山崎院を建てましたが、その遺跡が山崎廃寺跡です。そして、ここからも飛鳥寺禪院の同范瓦が出土しているのです。ほかの同范瓦出土遺跡も何らかの形で道昭の事績と結びつきをもっていると考えられます。

このように、飛鳥寺禪院の同范瓦は、畿内各地に足を延ばして各種の社会事業、土木事業をおこなった道昭の足跡をたどるかに分布しています。

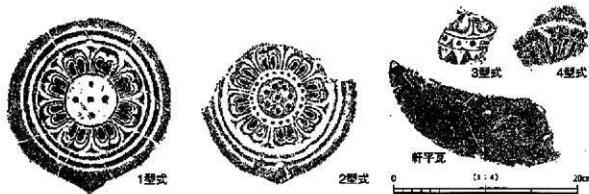
4 おわりに

出雲西部に分布する複弁の「水切り瓦」は古くから注目されてきましたが、そのなかには寺町廃寺跡のF1B同范瓦が存在します。大当瓦窯跡で働いていた瓦工が道具一式を抱えて出雲に足を運び、各種の瓦づくりに汗を流していたさまが目には浮かびます。瓦だけではありません。神門寺境内廃寺跡の伽藍配置が寺町廃寺跡と同じく法起寺式だとすると、建築設計士や大工さんも備後から来ていたのかもしれない。

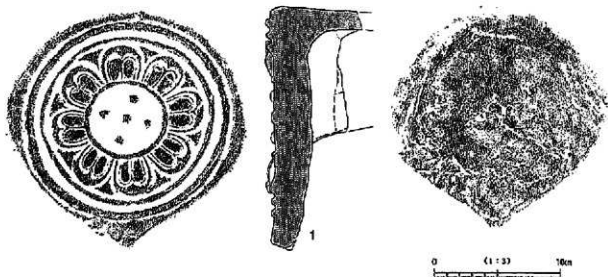
わが国最初の仏教伽藍・飛鳥寺を造営する時、経験も技術もなかったわが国では、百濟から「瓦博士」という瓦職人や「寺工(てらだくみ)」という建築家など各種技術者を招聘しました。飛鳥時代おわりの出雲西部では、これと同じように、瓦博士や寺工を、ここ三次の寺町廃寺跡に全面的に頼っていたと推測することができそうです。



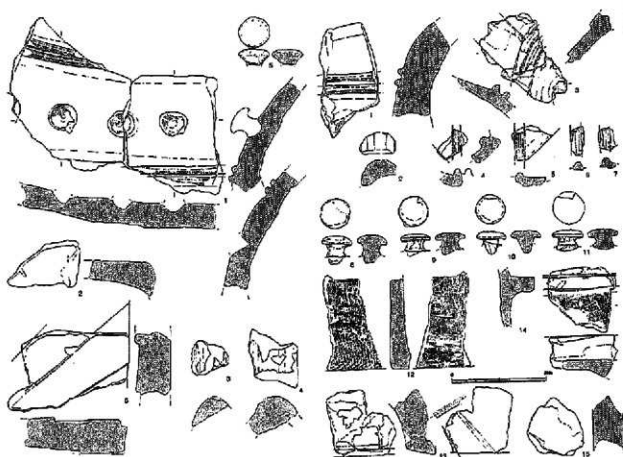
神門寺境内内庭における型式別軒瓦分布図 (1:1,000)



神門寺境内内庭寺出土軒瓦一覽 (1:4)



三井瓦遺跡 軒丸瓦 (1:3)



三井瓦遺跡 納尾及びその他の瓦埴類 (1:8)



龍鳥寺群院間相互出土遺跡 (1:300,000)

備後国「三谿寺」(≡寺町魔寺跡)の歴史的位置

広島大学名誉教授

西別府 元日

はじめに

報告書第7章第6節「『寺町魔寺』と「三谿寺」—文献史学の視点から—」

1	はじめに
2	『寺町魔寺』への層位的プロローグ
3	『寺町魔寺』の周辺—古代三谷郡の特質と地域社会
4	「三谷寺」の建立と「神祇」
	(1) 「三谷寺」の創建時期
	(2) 三谷郡大領祖の誓願—「神」「仏」の邂逅
	(3) 神祇と仏教—渾然から分立へ
	(4) 百済僧弘済の信仰と行動
5	「三谷寺」と寺町魔寺、その「統合」のために
6	結びにかえて

※三次市「寺町魔寺」一帯の宗教的特質を追究する必要性

※「寺町」という地名

建保6年(1268年)の「寺町 御山方供給米徴下事」という書きだしの高野山文書が存在することを確認(『鎌倉遺文』2352号文書)

1. 三谿郡大領祖の誓願「爲諸神祇造立伽藍」の意味を考える
神祇(神祇信仰における崇拝の対象)と仏(仏教における崇拝の対象)の並立

『日本書紀』における「天神地祇」「神祇」概念の形成 ⇒cf 別紙年表

6世紀中頃以前と7世紀終盤

天神 王権の由来や淵源ないしはその王権の内実に対応

神祇 天神とは異なる「神々」で幣帛を受ける

地祇 自然界の運行を司る存在=慰撫・敬拝・幣帛の対象(地祇)

※7世紀終盤の思念を、『日本書紀』編纂の際に6世紀以前に適用

6世紀後半～7世紀第Ⅲ四半期（550～675年頃）

仏教伝来を契機とした神々の体系や「社」の形成＝仏教への対抗

「神」（⇨仏・法・僧侶）や「神の社」（⇨仏教寺院）の意識

「神の宮を修し神霊を祭れば国栄えん」555年の蘇我氏一族の言

「神」「仏」を超える「天神」理念の形成（＝天皇權威の確立）



その転換の過程を反映した史料（『日本書紀』皇極天皇元年（642）紀）

六月乙酉の朔庚子、微雨。是の月に、大きに旱る。秋七月甲寅朔壬戌（九日）に、客星、月に入れり。（中略）戊寅（二十五日）、群臣相い語りて曰く、「村々の祝部の所教に随い或いは牛馬を殺し諸社の神を祭り、或いは頗りに市をし、或いは河伯を禱る。既に效するところ無し。蘇我大臣報へて曰く、寺々に於いて大乘の經典を轉讀しすべし。悔過すること佛の説く所の如くして、敬て雨を祈らんと。庚辰（二十七日）、大寺の南庭に於て、佛菩薩像と四天王像を嚴にして、衆僧を屈請して、大雲經等を讀ましむ、時に、蘇我大臣、手ずから香燭を執り、焼香して發願す。辛巳（二十八日）、微雨。壬午（二十九日）、雨を祈ること能わず。故に讀經を停む。八月甲申朔、天皇、南淵の河上に幸し、四方に跪拝して、天を仰ぎて祈りたまう。即ち雷なりて大いに雨ふり、遂に雨ふること五日、溥ねく天下を潤おし是に於いて、天下の百姓、俱に萬歳を稱して曰く、至徳（いきおい）まします天皇なりと。

（『日本書紀』卷 24、皇極天皇元年6月～8月条）

※「神祇」と「客神」(仏教の仏・法・僧)の役割が未分化＝671年頃
地方豪族は「神々」や「客神」を含めて「神祇」と認識していた？



☆「三谷郡大領祖」の誓願（「諸神祇のために伽藍を造立せん」）の意図

- ・ 自らの地位の淵源である先祖の「供養」
- ・ 王権周辺に芽生えた王権の天神への従属
- ・ 統轄する地域の平穏な自然や気象の安定等の祈願

2. 『日本霊異記』からみた弘済の来日時期と三谿寺創建

①百済滅亡以前の渡来僧の活躍

派遣軍が渡海する以前の斉明天皇治世期に百済僧侶の来日はありえた。

釈義覚は、本百済の人なり。其の国の破るる時に、後岡本宮に宇御めたまひし天皇（斉明天皇）の代に当りて、我が聖朝に入りて難破の百済寺に住む。法師の身の長七尺、広く仏の教を学びて心波若経を念誦む。

『日本霊異記』上巻 14 僧心経を憶持ちて現報を得奇しき事を示す縁

②弘済の来日時期

（百済滅亡以後？、報告書では 663 年倭軍・百済遺臣らの撤収～671 年頃と想定）⇒cf 別紙年表

朝鮮半島での旧百済軍の復興運動に決着がつき、その多くが日本へ亡命した時期から、唐が高句麗との戦争に勝利し対新羅戦争を本格的に想定・開始する時期

※百済遺臣や百済救援部隊が旧百済の版図から一掃されていること。その指標は、天智天皇 10 年（671 年）10 月から 11 月の新羅使者の来朝（この時期以前に高句麗遺民を援助し、旧百済の熊津都督府を併合）や郭務宗の 3 度目に来日以前になるのではないか。

※「三谷寺」の創建

⇒天武天皇即位前後には創建着手か？

白鳳期の寺院であることは确实

◆

伊予国越智郡司祖の寺院建立

③伊予国越智郡司祖先の寺院建立

伊予国越智郡の大領の先祖越智直、当に百済を救はむが為に軍に遣到さるる時に、唐の兵に擒はれ、其の唐の国に至る。我が国の八人同じく一の洲に住む。儻観音菩薩の像を得て信敬ひ尊重ぶ。八人心を同じくして、竊に松の木を截りて以ちて一の舟とし、其の像を請へ奉りて舟の上に安置き、おのおの誓願を立てて彼の観音を念ふ。爰に西風に

随ひ、直に筑紫に来る。朝庭聞きたまひて召して事の状を聞きたまふ、天皇急に矜みたまひ、楽ふ所を申さしめたまふ。是に越智直言さく「郡を立てて仕へむ」とまうす。天皇許可したまふ。然うして後に郡を建て寺を造り、すなはち其の像を置く。時より今の世に迄るまで子孫相継ぎ帰り敬ふ。けだし是れ観音の力にして信ふ心の至なり。丁蘭の木之母すらなほし生ける相を現し、僧の感りて画ける女すらなほし哀ぶる形を応ふ。何にいはむや、是れ菩薩にして応へざらむや、これ菩薩にして応へざらんや。

(『日本霊異記』上巻 17)

兵の災に遭ひ観音菩薩の像を信敬ひて現報を得る縁)

※伊予国越智郡司祖先らの帰国？ 唐への抑留期間？ 帰国時期は不明

※「天皇の矜み」「天皇許可」は天智か天武か？

※天武 14 年「諸国に詔す。家毎に、佛舎を造りて、乃ち佛像及び経を置きて、礼拝供養せよ。」という命令との関係？ (天武 14 年：685 年)

☆越智直氏の郡支配権の確立と寺院の創建は

天武朝後半ないしは持統朝

おわりに

「三谷寺」白鳳期前半 (670 年代) には、創建に着手された可能性が高い。地方寺院のなかでは早期の創建か？

寺町廃寺の建築学的考察

奈良女子大学・藤田盟児

1. 古代寺院の概要

- 558年に造営が開始された飛鳥寺が、遺構として確認できる最古の寺院。
 - 四天王寺式と呼ばれる塔を中心としたは、7世紀初頭に建設された斑鳩寺（若草伽藍）や四天王寺で、飛鳥時代末期に起工され、白鳳時代に完成した山田寺が最後。
 - 韓国では6世紀前半の百濟の軍守里廢寺や6世紀後半の定林寺、553年創建の新羅の皇龍寺など。
 - 645年の大化の改新によって始まった白鳳時代は、仏像を安置し儀式を行う金堂の意義が増大し、塔と金堂を並べる伽藍配置（塔が左側にあるものを法隆寺式、右側にあるものを法起寺式、金堂と塔が対面するものを觀世音寺式と呼ぶ）になる。
 - 7世紀末期の天武・持統朝になると、金堂が伽藍の中心となり、682年に金堂前に塔を2基を建てる本業師寺を起工。韓国でも679年創建の四天王寺を始めとして、統一新羅時代に多い。
 - 8世紀の奈良時代になると、塔は回廊外へ出され、金堂と前庭からなる儀式空間を中心にした伽藍配置になり、儀式を司る僧侶の場として講堂や僧坊も重視されていく。平城京に建設された大安寺、興福寺、元興寺、薬師寺の四大寺と、その集大成としての東大寺。
- つまり、寺町廢寺が採用する法起寺式は、遅れて仏教を受容したわが国が、先進国に追いつこうとした7世紀の政治的背景と、仏教建築の中心が塔から金堂へ変化していった白鳳時代の仏教の意義を反映した遺跡。

2. 法起寺式の寺院

- 7世紀後半に全国で500箇寺を数えるほどに急増した地方寺院は、基壇をもつ瓦葺の建築で構成される七堂伽藍が多いが、中央で壮大な伽藍が建設される8世紀になると地方では堂塔が1棟しかない小規模寺院が多くなる。つまり、8世紀には権力が中央集中される。
- 確認された古代寺院175例中では、法起寺式60例、四天王寺式と法隆寺式がそれぞれ30例ほど。
- 表1は、7世紀後半に限定し、かつ地形等からの推測に過ぎない事例も別にして、遺構として法起寺式であることが確認された28例。

濃い網掛け：遺構の検出が一部で伽藍の配置計画が検討できないもの。形式名になった法起寺も、金堂や講堂の規模が不明瞭で、配置計画を検討できない。

薄い網掛け：金堂と講堂が南北に並び、塔だけ東にずれているので、当初は金堂と講堂のみの伽藍で後に塔が建てられた金堂先行型の法起寺式と、中軸線が金堂に近く、講堂も金堂側に寄っているため、金堂重視型といわれる法起寺式。法起寺式とされる寺院の約半数は、実は金堂を重視した伽藍配置で、7世紀後半の金堂重視の傾向が、法起寺式とされる中に出現している。

つまり、金堂と塔を対等に併置した寺町廢寺の類例は、表1で白地のまま残された8例のみ。

3. 伽藍の中軸線について

- 山王廢寺（群馬県前橋市）は、金堂と塔の建物の中心を2分割する位置に中軸線が通ると推定しているが、講堂の東西長を発掘で確認した範囲を超えて延長しており疑問。
- 弥勒寺跡（岐阜県関市）も同上に推定しているが、中軸線の根拠となる南門、中門、講堂の位置や規模が不明で根拠が不確か。
- 穴太廢寺（滋賀県大津市）は、金堂と塔の向かい合った外壁の真ん中を中軸線が通るとする。これは法隆寺と同じ。ただし中軸線の根拠である講堂が8世紀に建てられた可能性があるため、8世紀の計画である可能性はある。
- 大寺廢寺（鳥取県伯耆町）は、推定されている講堂の中軸線は、金堂と塔の建物の中心の中心点でも、基壇間の中心でもない位置を通り、穴太廢寺と同じかもしれない。しかし、講堂の発掘範囲が狭く不明確。
- 石井廢寺（徳島県石井町）は、金堂と塔の礎石の残りが良く、西面回廊と金堂の基壇の距離が6.3mと寺町廢寺に近いので、同様の伽藍配置であった可能性があるが、東面回廊や中門、講堂が検出されていないので中軸線を推定できない。
- 那里廢寺（徳島県美馬市）は、東西回廊が検出されており、それぞれと金堂・塔との距離が寺町廢寺とほぼ同じであることから、同じ伽藍配置であった可能性が高いが、講堂や中門が未検出で未確定。

つまり、法起寺式の伽藍配置の設計方法を詳細に明らかにできる遺跡は、寺町廢寺の他にない。

表1、7世紀後半の遺構が確認された法起寺式寺院一覧

番号	建立時期	寺院名	基壇形式	基壇		礎		礎石		遺跡はか	中軸線
				遺構状況	基礎規模 (1)は建物基礎	遺構状況	基礎規模 (1)は建物基礎	遺構状況	基礎規模 (1)は建物基礎		
1	7世紀第3期 中期	下野院年中寺	不明	基礎のみ 15.45×12.42m	心礎と基礎	9.1m	不明	不明	不明	遺跡上の心石距離は 23.96m	
2	7世紀第4期 前半期	下野水下町年中寺	不明	基礎のみ 13×10m	基礎のみ	8m	地盤あり	18.6×13.5m	不明	不明	
3	7世紀後半	上野山正壽寺	切石礎	階段のみ不明	心礎のみ	13.6m 20.6m以上	基礎土のみ	31.0×24.5m	川原を東西で横切し、 川原の間に中門と礎石 が1つずつ残っている。	川原との距離から中軸と寺 の中心部の中央と想定し (かし1尺ずれている)。	
4	7世紀後半	龍河院龍壽寺	切石礎	基礎のみ 18.6×14.6m	不明		基礎土のみ	23×17.2m	会堂の遺跡に中門	会堂の位置に遺跡。	
5	7世紀後半	宇賀寺年中寺	不明	地盤のみ 18×10×17m	心礎はか	3.4m	礎のみ	残存18m	寺道らしき石列	不明。	
6	660-70年	瓦屋院龍壽寺	不明	地盤のみ 16.5×17.0× 15.9m	地盤のみ	7.5m	礎石3個	不明	不明	不明。	
6	660-70年	加賀北山寺	不明	高基礎のみ 13.8×18.4m	心礎のみ	(13.8×方3段で 10.8mと想定)	無		上野、東山宮73.4m、 得心土敷土層の距離 17.8m。	東山宮の中軸は会堂基壇 上を渡る。会堂と寺の基礎 間は15.6m。	
8	7世紀末	内野の地蔵寺	乱石礎	二重基礎 幅約5.4m	13.5×10.8m	二重基礎	8.1m	二重基礎	16×10.2m (2段×12m)	中門	礎は、中門・会堂・講堂の 中軸線から西へ張り出す。
9	7世紀後半	奥津野寺	石礎	礎石4個 14.88×12.42m (10.9×8.18m)	礎石4個 11.5m (9.36×7尺3節) 高さ0.9m	基礎のみ	24m×14m (9.36×4.6、南壁13 尺8.8尺)		東西両側を礎石。講堂 の南端に礎石が遺る。	会堂と寺の中心部の中央を 中軸線が通ると考えられる。	
10	7世紀末	若狭院龍壽寺	不明	基礎土のみ 17.8×14.8m	遺跡のみ	12m (9.32尺節8尺)	無	不明	不明	不明	
11	7世紀後半	近江六太寺	瓦礎	基礎のみ 22.14×18.72m	基礎の一部のみ	13.32m	乱石礎		西面遺跡の一部 存堂・礎の基礎間距離 15.8m	講堂の中軸線は会堂と寺の 建物心または基礎の中央で はない。	
12	7世紀後半	山城大宅寺	瓦礎	基礎東側一部 幅3.5m節1mの 丁成基礎あり	不明	基礎東側一部	不明	乱石礎	26×15m (22.8×12m)の 5段4層	礎地のみ	会堂と寺の基礎間約8m。
13	670年頃	山城東院寺	瓦礎	階段のみ 幅約5.8m 36段の甲瓦葺 厚さ約1.5m	瓦葺基礎の遺存 15.0×13.4m (赤土5.96×4.26) 赤土11.7×8.0m 20cm×4層 厚さ約1.5m	12.7m	粗い瓦礎 礎石2個 幅約0.8m	23.7×19.5m (2段12.6尺のほ か13尺)	北辺以外是不明	不明。会堂と寺の基礎間 約7.7m。 会堂は会堂西側に寄る。	
14	7世紀後半	山城北山寺	瓦礎	残存約1.4m	26.7×22.3m	残存約1.1m	13.4m (5.3m)	会堂礎石 北側立	23.5×13m (21×10.5m) 5段4層	東面遺跡のみ礎地。西 と東の礎石も。	不明時、会堂と寺の基礎間 約9m。講堂は方位角が異 なり立寄寄り。
15	会堂530年 660年西側	大野法起寺	瓦礎(指 貫)	西面の礎のみ 14.05×12.42m	遺跡あり 礎石高約1.4-1.75m	11.05m	北遺跡のみ		西面遺跡(約3.3m)のみ	会堂が西側・向ふ不明で中 軸線との関係不明。	
16	7世紀後半 奈良院年中寺 遺跡	大野法起寺	瓦礎	西面遺跡 16.4×13.8m (11.8×9.8m)	心礎あり	不明	地盤・遺跡の み	20.5×14.4m (17.5×10m) 5段4層	不明	西側より不明	
17	7世紀後半	紀伊乳石寺	不明	地盤のみ 15×13m	心礎あり	9m	不明	不明	不明	不明	
18	7世紀後半	紀伊佐野寺	不明	西面遺跡のみ 15×13.5m		12m	基礎の南東隅 のみ	24×15m	不明	礎は会堂の3m西で、講堂 は会堂に寄っている。	
19	7世紀第3期半 世紀	高作大野寺	乱石礎	礎石3個	不明	10.8m	竪立柱	不明	南門は3層2間の高立 柱遺跡。東側礎と礎。 礎の基礎地を有する。	南門より決まる中軸線は会 堂の中軸線と一致している。	
20	7世紀後半	橋本寺	礎	基礎、階段 残存約0.8m	15.74×13.40m	心礎、基礎、階段 残存約1.0m	11.14m	礎石1個、南 残存約0.7m	25.1×14.7m (赤土11.2×14 12.11尺8尺)	東西北両面遺跡。	会堂と寺の建物間の中央を 中軸線が通ると考えられる。
21	7世紀後半～ 8世紀初頭	橋本寺の北側寺	礎	地盤のみ 23.5×13.5m	高基礎と遺跡	12.6m	不明	不明	不明	不明。	
22	7世紀後半	国師土御前寺	乱石礎	基礎のみ 基礎19×16m	礎石17個、南 河原石と瓦化礎 軒出3.8m	14m (5.6方3節)	礎石4個	29×15m (9.6方3節)	中軸の9.8m處に中門 西面遺跡を有す。	会堂と寺の基礎間の中央を も、講堂の中軸線が通ると されている。	
23	7世紀後半	吉野大寺遺跡	瓦礎	基礎のみ 13.66×11.88m	基礎と礎石のみ	11.9m	基礎西面遺 跡	28.18×約17m	川原の南西角で礎石を 確認。	講堂の中軸線は、会堂と寺 の中心の中央と一致し、基礎 間の中央とも一致している。	
24	7世紀末	吉野大野寺	不明	基礎東側化装礎 取りのみ	南側17.0m	心礎と基礎土遺 跡	11m	竪立柱	19.5×13.4m (14.3×9.6m)	会堂と講堂が南に並び、 間は4.5mで遺る。	
25	7世紀末	足利下野院寺	礎	基礎土のみ 残存約5.6m	15.22×13.96m	心礎と礎石 残存約3.62m	13.36m (7.2m×6尺4節) 礎石幅2m×3段	無	不明	会堂と寺の基礎間は約6m と想定。	
26	7世紀後半～ 8世紀初頭	粟津島寺	不明	瓦遺跡		12.3m 表1.2m	不明	不明	不明	不明。	
27	7世紀後半～ 8世紀初半	河原井寺	不明	礎石29個、南 高1.0-1.95m	約14.0×12.1m (8.4×7.25m)	心礎と礎石10個	10.0m (5.38m)	不明	会堂基礎西側から 6.3mに西面遺跡あり	不明。 建物を中心の中央と想定し ている。	
28	7世紀後半	河津院龍壽寺	不明	地盤のみ 15×11.2mと想定	基礎と礎石2個	12.1m (6.42m)	不明	不明	遺跡は会堂の西側1m と寺の東方約8m	会堂と寺の間の中央と 一致し、法起寺に似ているとい う。	

4. 伽藍配置の復原

- 寺町庵寺では、金堂と塔の建物の中心を結ぶ線の midpoint (建物間 midpoint) は、講堂の中軸から推定した伽藍の中軸線から西へ60cmずれている。
- 金堂と塔の基壇同士の中心 (基壇間 midpoint) は、講堂の中軸から推定した伽藍の中軸線から東に40cmずれている。

以上から、講堂の中心線は、法隆寺や穴太庵寺のように、金堂と塔の外壁間の midpoint を通っているのではないかと考えるのが適当。

法隆寺では、金堂がある東側を、回廊の長さを1間長くすることにより、塔より平面規模が大きい金堂と回廊の間が狭くなることを解消しているが、寺町庵寺も同様。

このように寺町庵寺は、法隆寺の西院伽藍に匹敵する緊密な景観を形成していたと考えられる。このことから、金堂と塔の外壁の位置も推定できるのではないかと考えた。

- 金堂と講堂の外壁位置を、未知数Xを使って表す。金堂の外壁からの基壇の出をXmとする。塔の外壁からの基壇の出は、Xより小さいが普通なので、 $A < 1$ とすると、 AXm と表せる。
- ここで、基壇同士の距離をLmとすると、基壇の間の中点は基壇端より $1/2Lm$ にあり、それが上記のように講堂から推定される中軸線よりも東に40cmずれていたのを、これを代入すると、 $1/2Lm + Xm + 0.4m = 1/2(L + X + AX)$ という方程式が得られる。
- 方程式を整理すると、 $X(1-A) = 0.8m$ となる。したがって、金堂の基壇の出Xと、金堂と塔の基壇の出の比率Aは、一定の関係性があり、XとAの両方が上記の式を満たす場合でない、伽藍配置と適合しない。
- 金堂の基壇の出Xは、表2をみると、表3がない場合は2m以下、表3がある場合は表3を合せて3m以上。
- かりに金堂に表3がなかったとすると、Xは1.7m程度で、 $1-A = 0.8/1.7$ になるので、 $A = 約0.53$ となり、塔の基壇の出 $AX = 0.9m$ になるが、そのような塔は表3のように実在しない。
- そこで金堂には表3があったとして、基壇の出Xを3.5mと仮定すると、 $1-A = 0.8/3.5$ になるので、 $A = 0.77$ となり、塔の基壇の出 AX は2.7mになり、表3のように法起寺、奥山久米寺、貫田庵寺東塔などの類別がある。

表2 飛鳥・白鳳時代の金堂の平面規模

	建物幅(m)	基壇幅(m)	基壇の出(m)
法隆寺	13.99	23.63	4.82
南滋賀町庵寺	13.32	22.72	4.7
高麗寺	6.96	16	4.52
飛鳥寺中金堂	13.32	21.21	3.945
山田寺	14.52	21.6	3.54
川原寺中金堂	16.75	23.63	3.44
本業師寺	22.7	29.5	3.4
中宮寺	13	17.3	2.15
川原寺西金堂	17.85	21.81	1.98
崇福寺小金堂	8.18	11.6	1.71
貫田庵寺	12.15	15.5	1.675
飛鳥寺東金堂	16	18.78	1.39
繪園寺	13.92	16.35	1.215
野中寺	12.14	13.63	0.745

※『東アジア古代寺址比較研究(II)-金堂址編-(日本語版)』奈良文化財研究所、2015、「表4、金堂の平面比較表」より作成。2重基壇のものは上成基壇で検討。

表3 飛鳥・白鳳時代の塔の平面規模

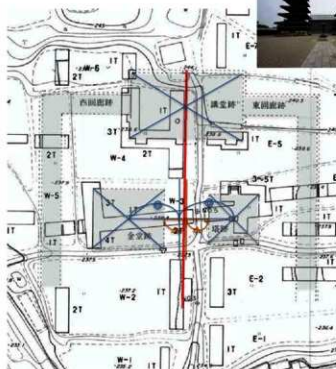
	建物幅(m)	基壇幅(m)	基壇の出(m)
尼寺庵寺	7.14	13.8	3.33
山田寺	6.52	12.85	3.17
本業師寺西塔	7.2	13.5	3.15
法隆寺	6.35	12.35	3
聖会寺	7.2	13.2	3
安部寺	6.36	12.1	2.87
都波庵寺	6.42	12.1	2.84
禪寂寺	6.4	12	2.8
奥山久米寺	6.6	12	2.7
法起寺	6.42	11.65	2.62
貫田庵寺東塔	6.9	12.1	2.6
貫田庵寺西塔	6	11	2.5
初田庵寺	7.2	12.2	2.5
西山庵寺	5.2	10	2.4
養生庵寺	5.4	10.2	2.4
鳥取寺	4.54	8.66	2.06
貫田庵寺西塔	7.26	10.8	1.77
聖徳寺	4.95	8.3	1.675

※『新・中日古代寺址比較研究(1)-木塚址編-(日本語版)』奈良文化財研究所、2017、表1「時代別の塔国、中国、日本の木塚址の平面比較表」より作成。2重基壇のものは参考までに法隆寺のみ掲載。

中軸線は、どこ？



法隆寺の場合



寺町廃寺の金堂のかたちは？



裏間(もこし)

庇(ひさし)と身舎(もや)



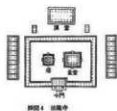
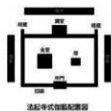
身舎のみの玉虫厨子+裏間=寺町金堂

- ところが金堂と塔の基壇の出を前述のように3.5mと2.7mにすると、基壇規模が金堂で15.74×13.40m、塔で11.14×11.14mであるから、建物の規模は金堂が8.74×6.40m、塔が4.14×4.14mになり、表2で分かるように金堂としては最小規模で、表3で分かるように塔には例がない。
- そこで、基壇の出をより小さく設定する条件が必要となり、表3より寺町廃寺の塔と同程度の11m前後の基壇規模をもつ法起寺の2.62m、西条廃寺の2.5mを参考にして、塔の基壇の出AX=2.5mとすると、塔の幅は6.14m(20.75尺)となり、初重の1辺の長さは21尺前後と18尺前後の2段階に分かれていたとされる飛鳥・白鳳時代の塔として適当値になる。
- そこで、塔の平面は、標準的な7尺×3間=21尺であったとする(法隆寺、滋賀の崇福寺、鳥取の斎尾廃寺、多賀城廃寺などと同等の上級の塔であったことを意味する)と、AX=2.46mになり、これとX(1-A)=0.8を連立方程式として解くと、A=0.7546なので、金堂の基壇の出X=3.26mとなる。
- このとき金堂の規模は、裳階を含めないと桁9.22m(1尺297mmで31尺)×梁間6.88m(同23.15尺)となり、表2に示した高麗寺の金堂に近くなる。高麗寺金堂は基壇の葛石に坪をつかう点でも寺町廃寺に類似する。
- 高麗寺の金堂は、3間×2間(6.96×4.24m)の身舎に、幅2.42mの裳階を付けた平面形式で、いわゆる庇がない。裳階も含めた規模は、5間×4間(11.7×9.0m)。
- 寺町廃寺の金堂も、庇が無く身舎に裳階を直接取り付けた形式として復原すると、身舎の桁と梁間は31尺×23尺になるので、高麗寺金堂よりも1辺が3mほど大きく、法隆寺金堂の身舎(32×21.6尺)とほぼ同じ。

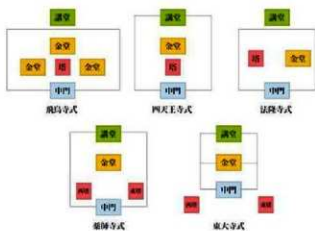
このような形式の金堂は、古代には実は多かったのではないと思われる。表1で金堂の基壇規模が判明している25例を見ると、法隆寺金堂と同等の20mそれ以上は5例のみで、法起寺も含めて16例は寺町廃寺金堂に近い13~17mに収まっている。身舎・庇・裳階があるためには基壇幅が20m以上必要なので、この16例は庇か裳階がなかったと考えられる。そのいずれかは、礎石の規模・形式や伽藍配置との関係から再考しなければならない。なお、この形式は朝鮮半島では後世まで継承されており、1651年建造の麻谷寺大雄宝殿などがある。

5. 金堂と塔の形態

- 庇がないことから屋根形式は、切妻造。身舎が3間×2間で切妻造の例は玉虫厨子がある。
- 白鳳時代までの身舎だけからなる金堂は、僧侶が入ることができる裳階を、仏像を安置する厨子のような身舎の周囲に付加した形式であった可能性がある。
- 金堂と塔の基壇の高さは、共に求めた基壇の出の0.55倍であり、相似形。これも景観を重視した設計の証。
- 塔の階段は、基壇が低いにもかかわらず金堂の階段と同じ位置まで出すので、勾配が緩い。これも使い勝手より景観を重視した証。



法隆寺金堂の震階



古代寺院の伽藍形式

備後・安芸の白鳳期寺院と寺町廃寺

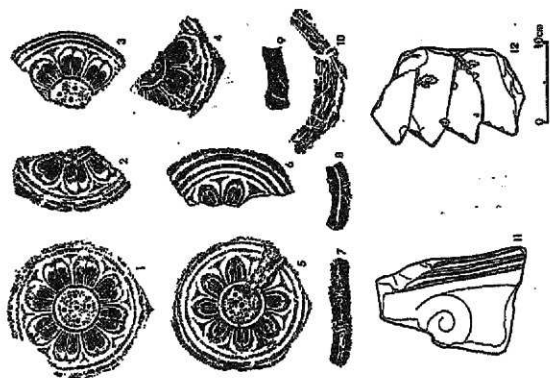
松下正司

1. 備後国の白鳳期寺院跡
 - a 立地と遺構
 - b 出土遺物と年代
 - c 備後白鳳期寺院の特徴
2. 安芸国の白鳳期寺院跡
 - a 立地と遺構
 - b 出土遺物と年代
 - c 安芸白鳳期寺院の特徴
3. 寺町廃寺の様相
 - a 法起寺式伽藍配置と埴積基壇
 - b 灯籠跡と幢幡跡
 - c 唐三彩の出土
 - d いわゆる水切り瓦の特徴と課題
 - e 大当瓦窯跡の調査と課題
 - f 寺町廃寺と上山手廃寺の課題
 - g 寺町廃寺と『日本霊異記』の三谷寺
4. 備後・安芸の寺院跡から見た寺町廃寺
 - a 備後国と安芸国の白鳳期寺院跡
 - b 芸備に於ける水切り瓦の展開
 - c 寺町廃寺の特異性
5. 今後の課題

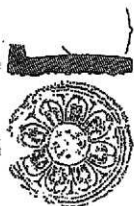
安芸・備後の初期寺院跡一覽表

区分	遺跡名	所在地	時代			
			飛鳥	白鳳	奈良	平安
東部	鹿野門山下遺跡	岡山	●			
	新屋遺跡	岡山	●			
西部	<蓮華寺跡>	安芸			●	
	<武光具寺跡>	安芸			●	
北部	引宮延壽寺	高松			●	
	正敏田遺跡	高松			●	
備後	(内影子遺跡)	安芸			●	
	小山地跡	安芸			●	
	中安寺跡	安芸			●	
	宮の跡	安芸			●	
	<神原寺跡>	高松			●	
	長原寺跡	高松			●	
	長吉江寺跡	高松			●	
	本舞平跡	高松			●	
備前	原野寺跡	高松			●	
	上山寺跡	高松			●	
	寺可跡	高松			●	
	寺戸跡	高松			●	
	(亀井遺跡)	高松			●	
	供持跡	高松			●	

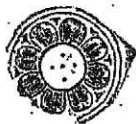




第1图 双元院寺出土瓦·残瓦



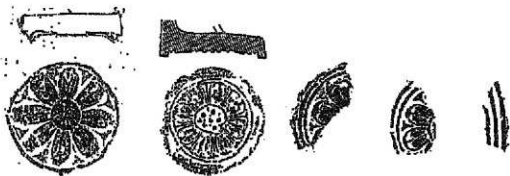
第2图 双元院寺出土瓦



第3图 双元院寺出土瓦


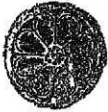

















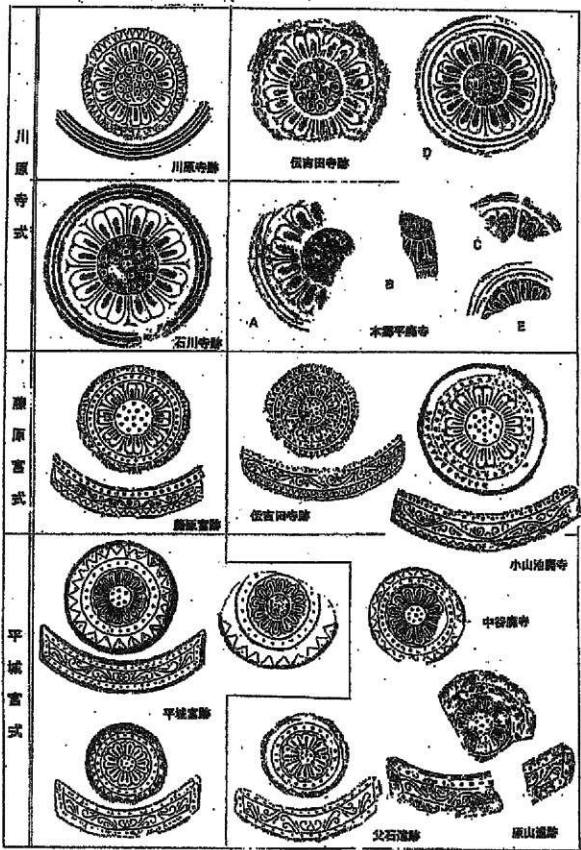
第4图 双元院寺出土瓦·残瓦

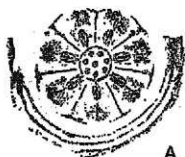


第5图 双元院寺出土瓦

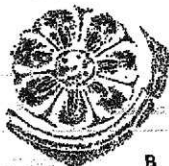
大和の瓦と芸備の瓦

飛鳥様式	 和田寺	 尾沙門山下遺跡	
山田寺式	 仮山田寺跡  槍塚寺跡  原原寺跡	 横見寺  正殿田遺跡  明宮地蔵寺	  
法隆寺式	 若草伽藍跡  西院伽藍跡	 横見寺  内砂字遺跡	 小山池原寺





A



B



C

<安芸地域> 水切瓦

明官地廃寺 A B

横見廃寺 C

【参考文献】 備後・安芸白鳳期寺院跡調査報告書一覽

《備後北部》

- * 『寺戸廃寺跡発掘調査報告』1～2 (三次市教育委員会、1970～1971年)
- * 『備後寺町廃寺—推定三谷寺跡第④次発掘調査報告—』1～4 (三次市教育委員会、1990～1993年)
- * 『史跡寺町廃寺跡—推定三谷寺跡第1～6発掘調査報告書—』(三次市教育委員会、2022年)
- * 『上山手廃寺発掘調査報告』1～3 (広島県教育委員会、1979～1981年)
- * 『備後東部寺跡—発掘調査報告 1～3—』(世羅町教育委員会、1992～1994年)
- * 『備後東部寺跡—発掘調査報告—』(世羅町教育委員会、1996年)

《備後南部》

- * 『伝吉田寺跡発掘調査報告』(広島県教育委員会、1968年)
- * 『伝吉田寺跡—平成30年度調査に関する報告—』(府中市教育委員会、2019年)
- * 『史跡名の前廃寺』(福山市教育委員会、1977年)
- * 『小山地廃寺跡発掘調査報告』1～3 (広島県教育委員会、1977～1979年)
- * 『備後中谷廃寺』(神辺町教育委員会、1981年)
- * 『本郷平廃寺—昭和60・61年度発掘調査報告—』(高瀬町教育委員会、1986～1987年)
- * 『本郷平廃寺』(高瀬町教育委員会、1989年)

《安芸》

- * 『安芸横見廃寺の調査』I～III (広島県教育委員会、1972～1974年)
- * 『明官地廃寺跡』試掘調査概要 (吉田町教育委員会、1985年)
- * 『明官地廃寺跡』第1次～第5次発掘調査報告 (広島県立歴史文化館センター 1987～1991年)
- * 『建隆寺下遺跡発掘調査報告』(府中市教育委員会 1996)

参 考 資 料



寺町廃寺跡の周辺

寺町廃寺跡と『日本靈異記』

『日本靈異記』(にほんりょうい き) = 日本最古の仏教説話集

〔(正式名) … 『日本国現報善悪靈異記』(にほんこくげんぼうぜんあくりょうい き)
(編纂者) … 葉師寺(奈良県)のお坊さん、景戒(けいかい)〕

『日本靈異記』上巻7縁 - 備後国三谷郡のお寺、「三谷寺」 -

亀の命を贖ひ生を放ちて現報を得亀に助けらるる縁 第七

禪師弘濟は、百済国の人なり。百済の乱の時に當りて、備後国三谷郡の大領の先祖、百済を救はむが為に軍旅に遣さるる時に、誓願を發して言さく「もし平に還来らば、諸の神祇の為に伽藍を造立て多諸くの寺を起らむ」とまうす。

遂に災難を免れ、すなはち禪師を請へて相共に還来り三谷寺を造る。其の禪師の伽藍と諸の寺とを造立てたる所以なり。道俗觀て、共に為に欽敬ふ。禪師尊き像を造らむが為に、京に上り財を売る。既に金と丹との等き物を買得て、難破の津に還到る。時に海の辺の人なる亀四口を売る。禪師人に勧へて買ひて放たしむ。すなはち人の舟を借り、童子二人を將て共に乗りて海を渡る。日晩れ夜深けて舟人欲を起し、備前の骨嶋の辺に行到りて、童子等を取りて海の中に擲入る。然うして後に禪師に告げて云はく「速に海に入るべし」といふ。師教化ふといへども賊なほ許さず。茲に願を發して海の中に入る。水腰に及ぶ時に石を以ちて脚に當つ。其の暁に見れば、亀負へり。其の備中の浦にして、海の辺に其の亀、三嶺きて去る。是れ放てる亀の恩を報ゆるかと疑ふ。

時に賊等六人、其の寺に金と丹とを売る。檀越まづ量るに価を過ゆ。禪師後に出でて見れば、賊等忙然しくして退進を知らず。禪師憐愍びて刑罰を加へず。仏を造り塔を嚴り、供養しじりぬ。後に海の辺に住みて行き来る人を化ふ。春秋八十有余のとしに卒ぬ。畜生すらなほ恩を忘れず、返りて恩を報ゆ。何にいはむや、人にして恩を忘れむや。

(出雲路修 1996『日本靈異記』新日本古典文学大系 30 岩波書店 を一部改変して引用)

『日本靈異記』上巻7縁

説話の主な流れ

- ① 備後国三谷郡（現在の三次市南部）の郡司大領の先祖が、白村江の戦いに参戦
→ 「もし無事に帰ってくることができたら、三谷の地にお寺を建てる」と願う。
↓
- ② 終戦後、百濟（くだら）僧 弘濟（ぐさい）を連れて帰還し「三谷寺」を建てる
↓
- ③ 弘濟 は、仏像の材料を買いに都に出かけ、その帰り道に海辺で亀を助ける。
→ 亀を助けた後、盗賊に襲われたものの、海辺で助けた亀の報恩で難を逃れた話

百濟僧 弘濟が建てた「三谷寺」 = 寺町廃寺跡 では？

明治 36 (1903) 年、村岡良弼氏、寺町廃寺跡を「三谷寺」に比定 (村岡 1903)

※ 「白村江の戦い」【天智 2 年 (663 年)】とは？

朝鮮半島の白村江で行われた、百濟復興（現在の朝鮮半島東南部にあった国）を目指す
日本・百濟の連合軍と、唐（現在の中国）・新羅連合軍との戦い。



寺町廃寺跡で発見された建物跡

◎ 金堂跡（こんどう）… 仏像を守る重要な建物

〈基壇〉（きだん）

規模 … 東西 15.74 m × 南北 13.40 m, 現存高 0.6~0.8 m

化粧 … 外側の全面に、埴（せん）を立てる。

〈階段〉

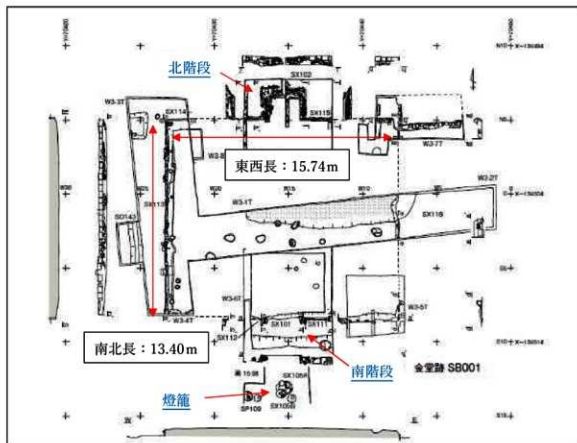
南階段 … 東西幅 2.59 m, 奥行（現存）0.7 m, 現存高 0.6 m

北階段 … 東西幅 2.62 m, 奥行（現存）2.0 m, 現存高 0.5 m

〈燈籠〉（とうろう）

規模 … 隅丸方形の据付掘方。東西 1.05 m × 南北 0.9 m, 深さ 0.6 m

材質 … 木製の可能性が高い。全国4例目で日本最古級か？



金堂跡 平面図（縮尺任意）



① 金堂跡 基壇西辺 (西北から)



② 金堂跡 基壇西辺 (北から)



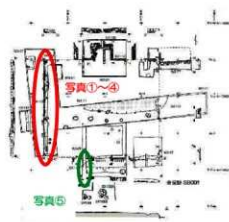
③ 金堂跡 基壇化粧



④ 金堂跡 基壇化粧

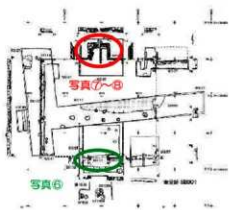


⑤ 版築 (はんちく) の確認





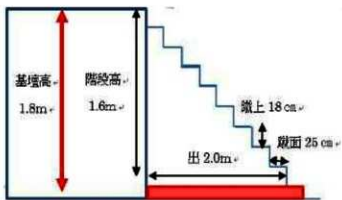
⑥ 金堂跡 南階段（南から）



⑦ 金堂跡 北階段（北から）



⑧ 金堂跡 南階段（北から）



※ 金堂跡 北階段の復元図

◎ **塔跡**（とう） … 寺院のシンボル。經典や仏舍利が保管される建物。

《**基壇**》

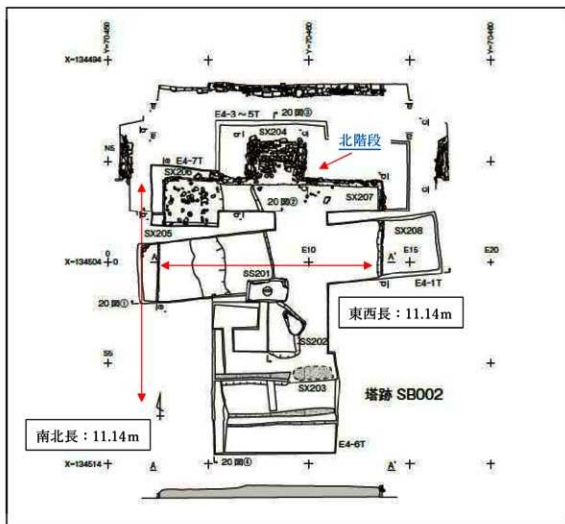
規模 … 東西 11.14 m × 南北 11.14 m, 現存高 0.6~0.8 m

化粧 … 外側の全面に、埴（せん）を立てる。

《**階段**》

南階段 … 後世の水田開発によって、すでに削平。

北階段 … 東西幅 2.3 m, 奥行（現存） 1.95 m



塔跡 平面図（縮尺任意）



① 塔 跡 基壇西北隅 (西北から)



③・④ 基壇化粧



② 塔 跡 基壇北辺 (北から)

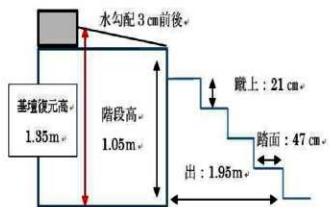




⑤ 塔 跡 北階段（北から）



⑥ 塔 跡 北階段（東から）



※ 塔跡 北階段の復元図



◎ **講堂跡**（こうどう）… 僧侶がお経を唱える建物。

〈基壇〉

規模… 東西 25.10 m × 南北 14.70 m, 現存高 0.6 m

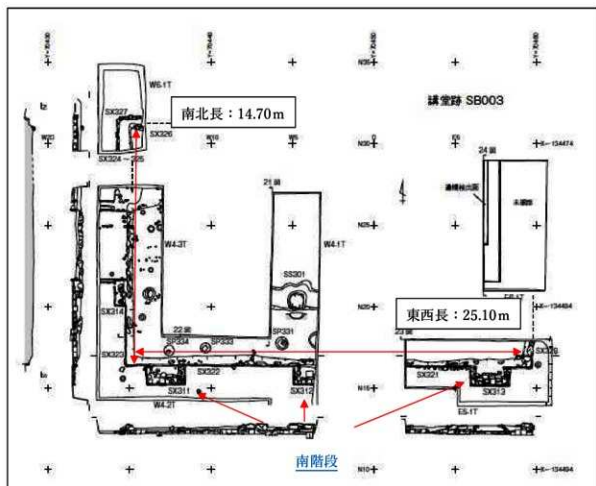
化粧… 外側の全面に、埴（せん）を立てる。

〈階段〉

南中央… 東西幅 3.8 m, 奥行 0.9 m, 現存高 0.48 m

南面東… 東西幅 2.5 m, 奥行 0.9 m, 現存高 0.35 m

南面西… 東西幅 2.5 m, 奥行 0.9 m, 現存高 0.30 m



講堂跡 平面図（縮尺任意）



① 講堂跡 基壇（西南から）



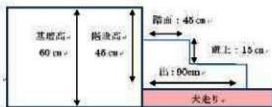
② 講堂跡 南面中央階段（南から）



③ 講堂跡 基壇外表（南から）

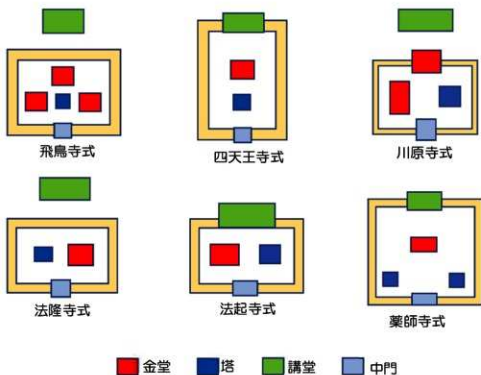


④ 講堂跡 南面西側階段（南から）

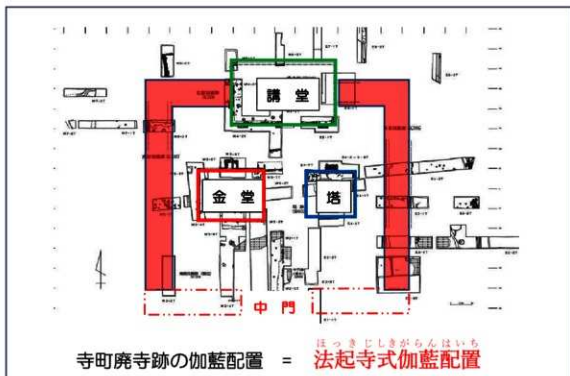


※ 講堂跡 南階段の復元図

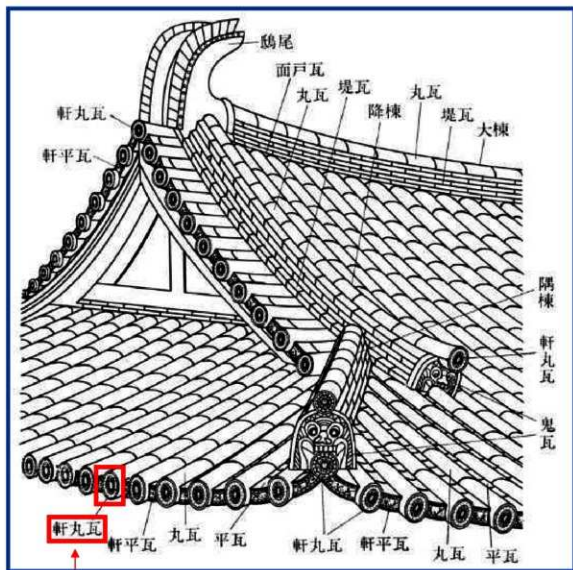
寺町廃寺跡の伽藍配置



主な古代寺院の伽藍配置(金堂・塔・講堂の配置)

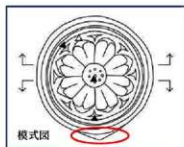


寺町廃寺跡の出土品



(古代寺院の屋根瓦 各部名称)

【寺町廃寺跡の軒丸瓦のPoint】



赤丸の部分 : 三角形に尖っている。



頂点で水が切れるようにも見える = 「みずき がわら **水切り瓦**」

◎ 軒丸瓦（のきまるかわら）



◎ 唐三彩（とうさんさい） … 盛唐期の唐三彩。形から長頸壺の破片とみられる。



至文堂『日本の美術 唐三彩』から転載

寺町廃寺跡の周辺遺跡

- ① 大当瓦窯跡（だいてうがやう） …… 三次市和知町大字大鳴に所在
→寺町廃寺跡と同じ文様の瓦を確認。寺町廃寺跡の瓦を生産していた窯跡。
- ② 上山手廃寺跡（かみやまてはいじ） …… 三次市向江田町上山手に所在
→寺町廃寺跡と同じ文様の瓦を確認。寺町廃寺跡とほぼ同じ時代の寺院跡。



大当瓦窯跡（だいてうがやう）



上山手廃寺跡
（かみやまてはいじ）



『史跡寺町廃寺跡・推定三谷寺跡第1～8次発掘調査総括報告書』刊行記念シンポジウム

「史跡 寺町廃寺跡（推定三谷寺）を語る」 資料集

令和4年11月19日（土） 10：00～15：00

会 場：みよしまちづくりセンター

主 催：三次市教育委員会

協 力：みよし風土記の丘ミュージアム（広島県立歴史民俗資料館）、三次地方史研究会

注意：本資料を許可なく無断転載したり、複製したりする行為はご遠慮ください。

「神祇」崇拝と仏教浸透 関係年表

2022年11月19日

西暦	日本・東アジアの政治的社会的動向	「神祇」「天神」【地祇】崇拝関係	仏教関係
	神武即位前紀 綏靖即位前紀 【安寧→懿徳→孝昭→孝安→孝靈→孝元→開化】 崇神即位前紀 崇神 12年 垂仁 27年 景行 18年 【→成務→仲哀】 応神即位前紀	「神祇」「天神」【地祇】崇拝関係 天神を祠りて大孝(皇祖による補佐)を陳べん 汝の補佐となり神祇を奉典せん 神祇を崇め重んじ、天業をおさめん 初めて人民を授けし調役を課す。天神地祇が喜び風雨時順となる 兵器を幣物として神祇を祭る 九州遠征途上、天神地祇に祈りて水を得、勝利す 誕生にあたり天神地祇が三韓を与えた伝承	仏教関係
478	倭王武(雄略)が宋に遣使		
507	継体朝の成立		
527	筑紫国造磐井の乱		
534	備後の後城など全国に屯倉の設置		
538		555 百濟聖明王死去(新羅との戦争で死去) (神の宮を修し神霊を祭れば国栄えん)	538 百濟聖明王が仏像と経論を送る
587	用明天皇(586即位)三宝帰依を表明		577 百濟王から経論など献上 579 新羅王から仏像献上 584 司馬達止の娘嶋(11歳)ら出家 馬子仏像を作る(仏法之初、自益而作) 585 敏達天皇、守屋に排仏を命じる 587 蘇我馬子ら物部守屋らを滅ぼす 588 (崇峻天皇即位) 法興寺造営開始
592	蘇我馬子が崇峻天皇を暗殺させる		594 推古天皇が三宝興隆の詔 「詔皇太子及大臣、令興隆三寶。是時、 諸臣連等、各為君親之恩、競造仏舎、 即是謂寺焉」
600		607 皇太子と大臣、百寮を率て神祇を祭ひ拜る	605 飛鳥大仏(法興寺大仏)造営 606 このころ法隆寺の造営始まる
	(642年皇極天皇即位)	642 皇極(のちの斉明)天皇らが早に際して祈雨	622 厩戸皇子死去、釈迦三尊造像 624 僧尼檢校のシステム開始 ※624年の寺46、僧816人、尼569人 639 百濟大寺の造営始まる
645	6月乙巳の変(大化の改新)翌年正月「改新の詔」発布		
653	孝徳天皇と中大兄皇子不和(皇權分立)		
660	5~7月百濟首都陥落、王族は長安へ連行・抑留 10月日本、百濟救援を決定 12月百濟救援軍本隊(齊明天皇・中大兄皇子ら)難波へ		
661	1月救援軍本隊、難波を出発 7月齊明天皇死去 10月中大兄皇子ら大和に帰還 (中大兄皇子の即位は668年)		
662	正月百濟救援部隊渡海		
663	3月救援軍、新羅を攻撃 8月白村江の戦い 9月日本軍・百濟遺臣撤退		
664	5月唐使者郭務宗ら来朝		
665	9月郭務宗再び来朝 唐へ使者派遣		
666	唐が高句麗に出兵		666 野中寺で「稻寺知識」造像刻銘
667	3月近江に遷都 11月遣唐副使ら唐使と帰国		668 近江に崇福寺建立発願
668	6月新羅使者来日 7月天智天皇即位 9月高句麗滅亡 10月新羅使者来日		
670	唐と新羅の戦い(〜675)		
671	正月大友皇子執政体制の整備 10月中臣鎌足死去 11月唐使者郭務宗来朝 12月天智天皇死去	671 11月 左大臣蘇我赤兄ら(天皇の命に背けば)四天王の仏問をうけ、天神地祇の誅罰をうけん。	
672	6~8月壬申の乱(翌年正月天武天皇即位)	676 早に際して、使者を四方に遣わし幣物を擲けて諸々の神祇に祈らしむ。 677 5月 早、京及び畿内に零す	683 百濟僧道蔵、零して雨を得る 685 諸国家毎に、佛舎の造営などを指示
686	9月天武天皇死去、持統天皇即位	686 天皇の病平癒を神祇に祈る 689 8月神祇官を会集して天神地祇のことを宣べ奉る 690 正月天皇の即位にあたり天神の壽詞(よごと)を読む 690 正月幣を畿内の天神地祇に班ち、神戸・田地を増す 691 大嘗(新嘗)に天神の壽詞を神祇伯が読む	
694	12月藤原京に遷都		
697	9月文武天皇即位	697 6月幣を神祇に班ちまう	697 6月天皇平癒のために造仏。